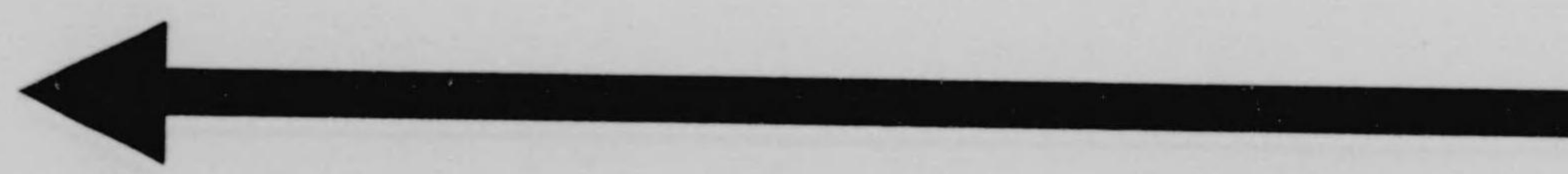


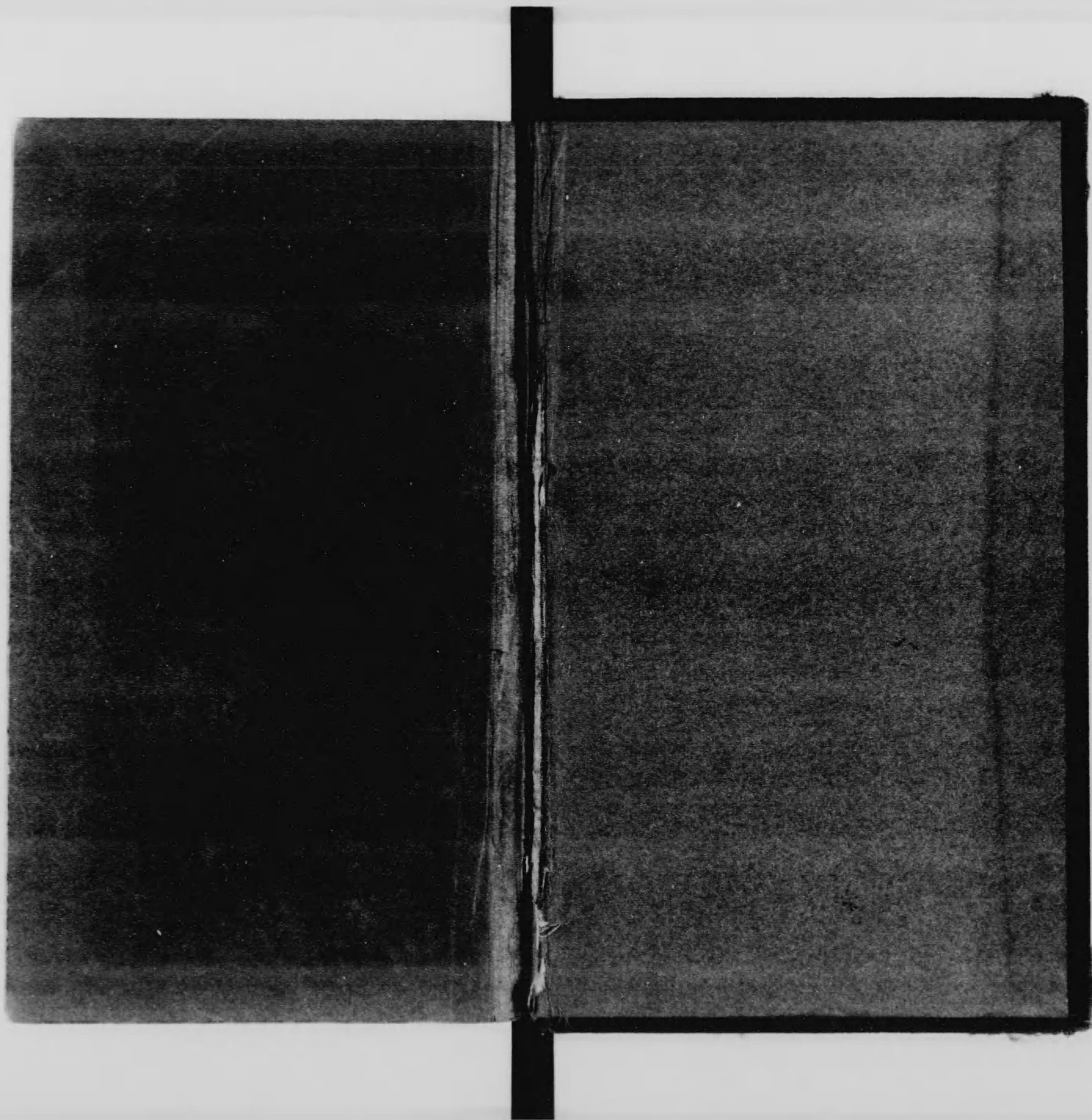
373

48



始





上毛
三山

妙義山

岩澤正作著



373-48



義山
三毛

岩澤正作著

大正
6. 11. 2
内交

欠



數四

上海圖書館藏





む望な門神隨りよ橋鼓太社神義妙



社 神 嶽 之 中

欠



金洞山鏡岩



白雲山遠望

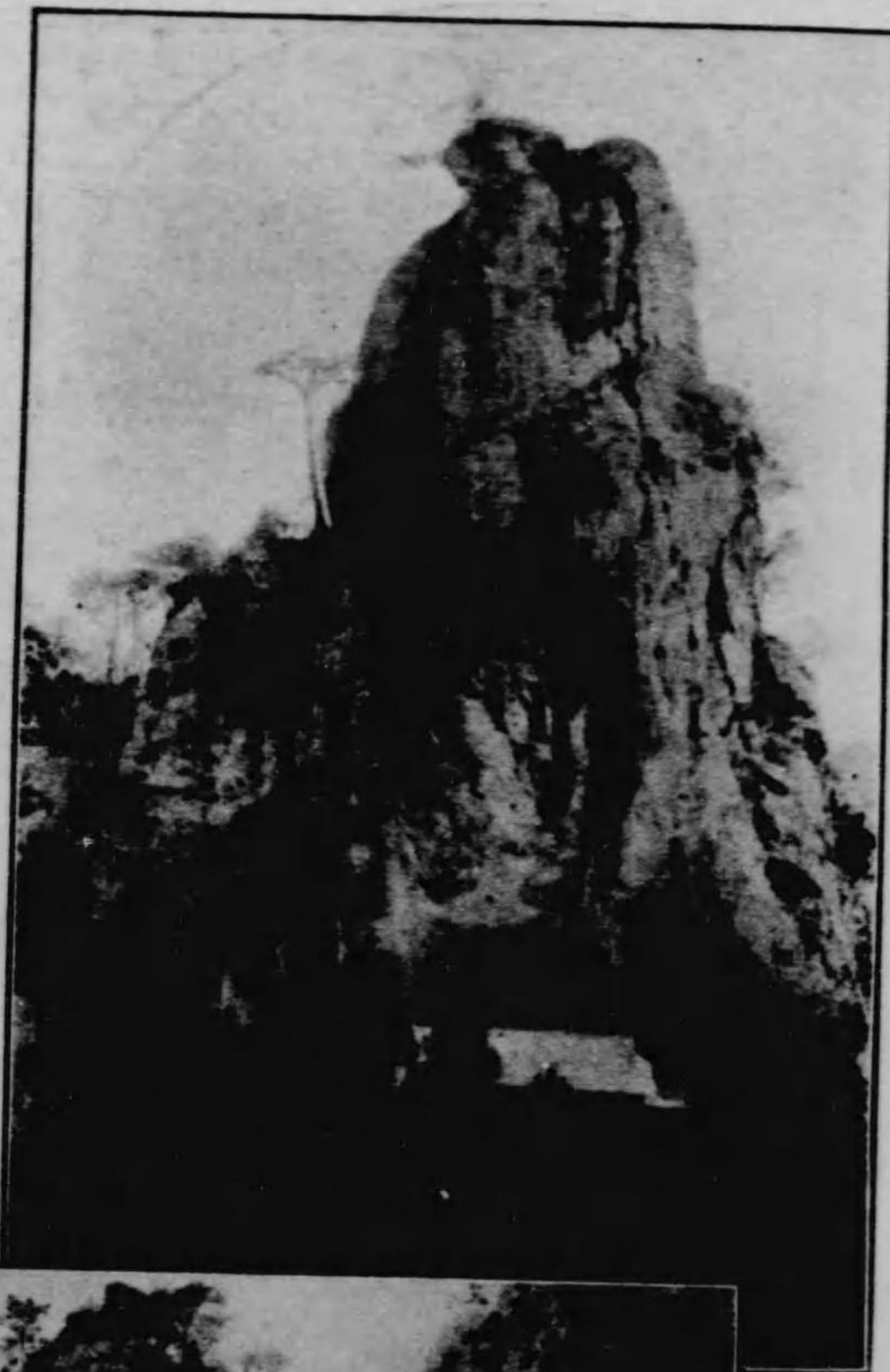


金洞山第二石門



金洞山第一石門

金洞山中之嶽旭嶽及奧宮



金洞山第四石門



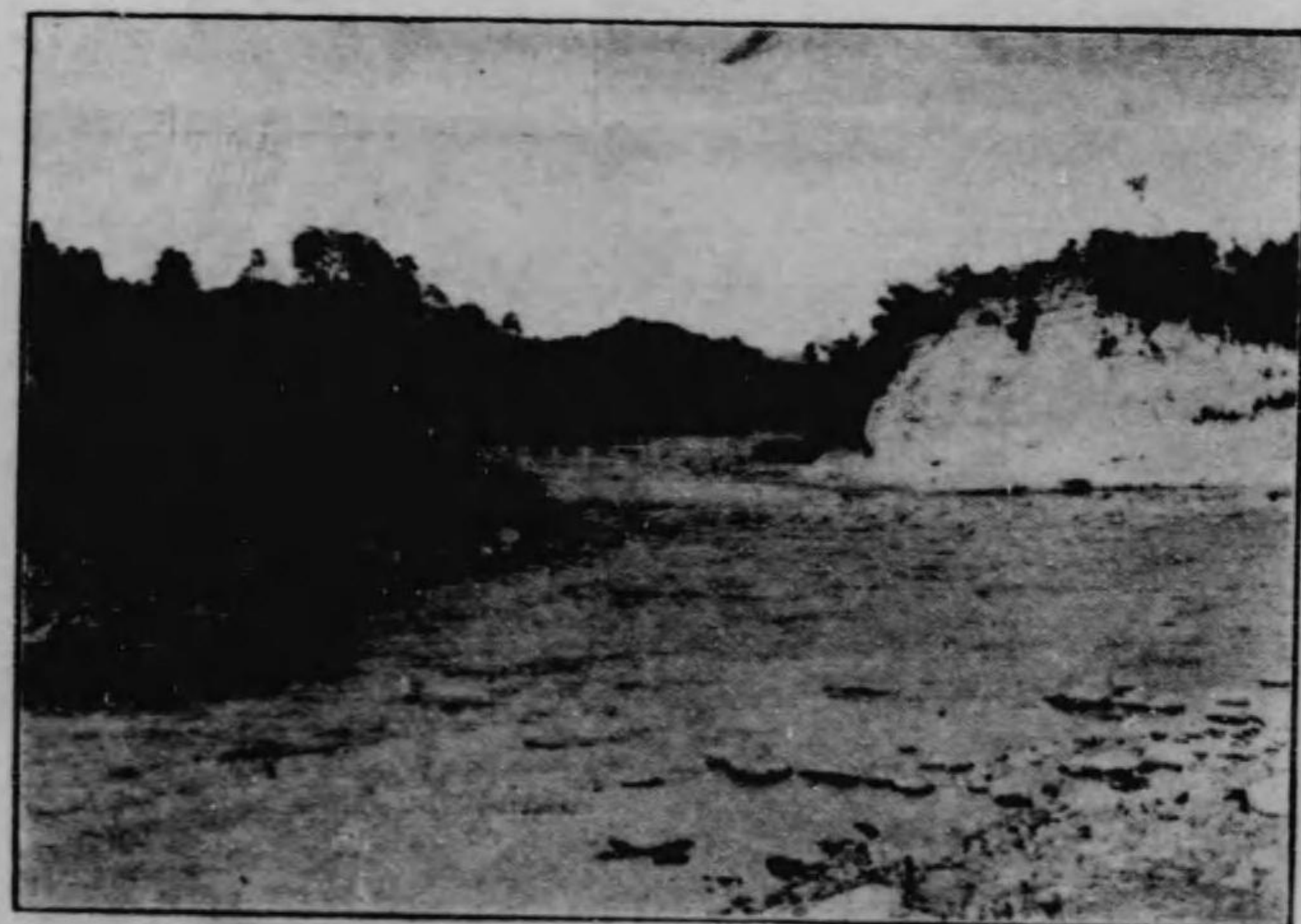
金洞山第三石門



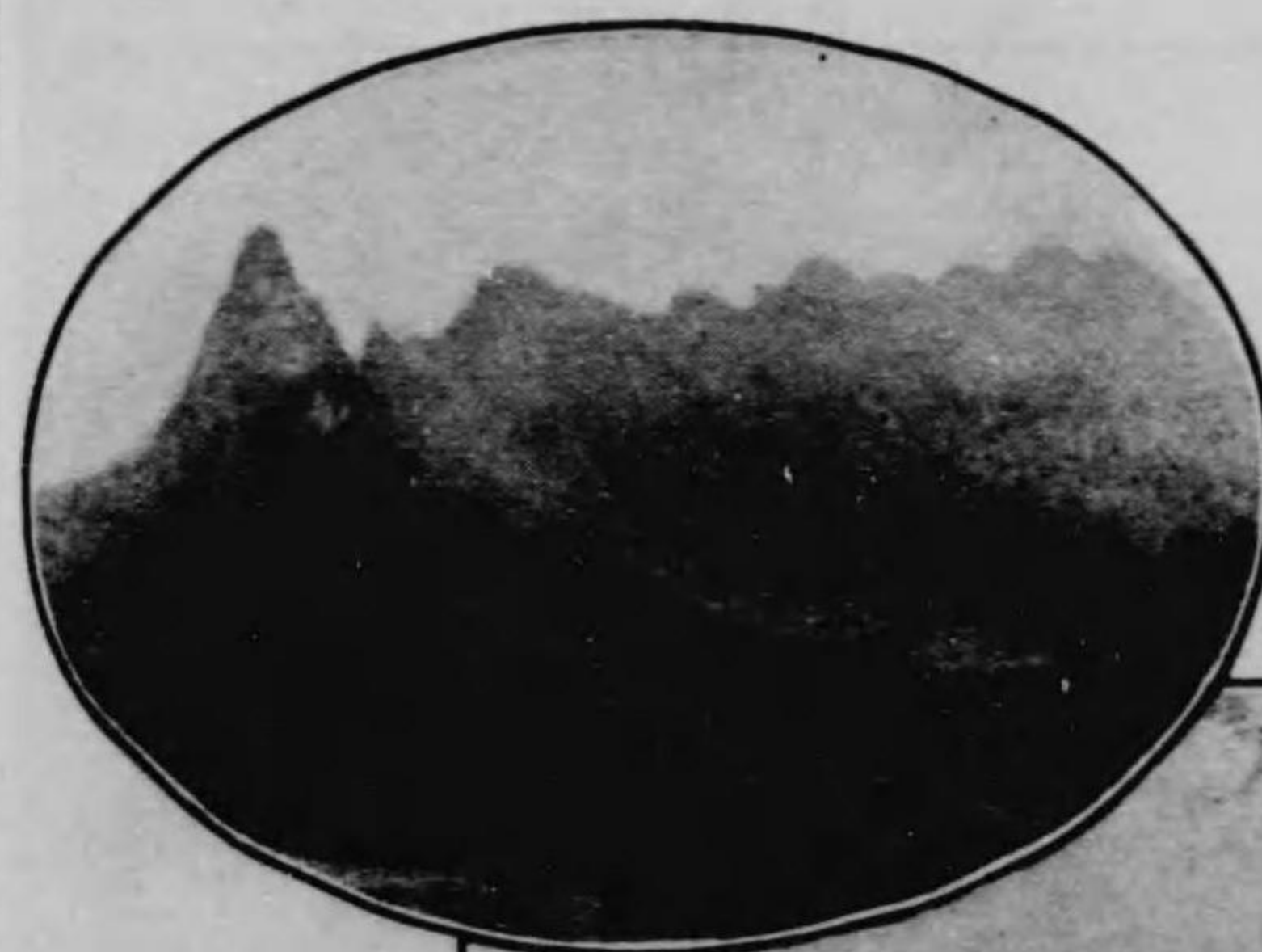
金洞山大砲岩及動岩



色夕之山義妙りよ川氷碓



川氷碓之下園公部磯



金鷄山全景



金鷄山御座所岩

磯部鎮泉地附近松岸寺内
佐々木盛綱之古墳



磯部鎮泉地附近松岸寺内
佐々木盛綱之古墳

自叙

著者は、正菊を以て名ある、神奈川縣武藏國川和と云ふ、片田舎に生れ、明治三十一年十二月、再度の秩父地方地質巡檢旅行に際して、金ヶ崎より鬼石に出て神流川溪を浜り、万揚、神ヶ原を経て、杖突峠を越え、下仁田に到り、小坂の鐵鑛山と砥山とを見て、菅原より妙義町に上りたるは、實に明治三十二年一月元旦の夕刻であつた。翌二日白雲、金洞の二山に登り、松井田に下り、高崎に一泊して歸京の途に就いた。之が著者上毛入りの嚆矢である。越えて三十三年五月、高崎より室田を経て、榛名山に登り、伊香保に一泊し、翌日水澤を経て、高崎に出で熊谷に一泊して歸京した。三十五年九月末日、前橋中學校に赴任して、翌十月第二日曜日に、若井氏の東道を以て、始めて赤城山に登り、茲に三山第一回の登山を遂げた。爾後三山の研究に指を染めた。三十八年四月、高崎中學校に轉勤の命を受け、茲に上毛地質標本の蒐集を志した。明治四十二年本縣主催關東北府縣聯合共進會の開催に際し、先輩の勸告を入れ、『三山案内』の編纂を企てたるも、

同會附屬教育品展覽會に出品せむとて、急遽縣下を一巡して、上毛地質標本の蒐集に努力したる爲に、期を逸して、略成りたる『三山案内』の原稿は、其の儘筐底に潜めた儘今日に至つた。昨大正五年、赤城登山第六十一回の記念として、『赤城山』の稿を起し、脱稿迄に尙四回登山して、漸く十一月に刊行することを得た。今春同僚丸山君と三山巡りを企て、妙義山に登りたるに、養氣館主人は『赤城山』の姉妹冊子として、『妙義山』の刊行を勧められた。予に於ても、前年來企畫する所ありたれば、その後五回登山して、漸く此の小冊子を發表することを得たるも、是れ著者の研究報告と稱すべき程のものにはあらで、多くは先輩の遺物を蒐め、之に登山の折見聞したる事柄を附記したるものなれば、稍委しき案内書たるに過ぎぬ。尙『上毛三山妙義山』といふ名稱を附したるは、聊妥當を缺く感がある。讀者幸に諒せられよ。

大正六年初秋

上毛大間々町赤城書屋にて

四拙 岩澤正作

上毛三山 妙義山目次

一、緒言に代へて……………一

一、總説……………五

位置境域、成因及變遷。

○一、山嶽……………一一

白雲山、白雲山探勝案内。 金洞山、金洞山探勝案内。 金鷄山、金鷄山探勝案内。

一、河川……………三八

一、水源妙義山外にありて、山腰の一部を區劃するもの
碓氷川、西牧川。

一、水源妙義山中にありて所謂副射谷をなすもの

五料川、小坂川、高田川。

- 一、生物界 : : : : : 四〇
- 一、妙義町 : : : : : 五三
- 一、神社 : : : : : 五五
妙義神社、中之嶽神社、附長清道士、同碑文、御嶽神社。
- 一、旅館及休憩所 : : : : : 七八
- 一、山案内 : : : : : 八四
- 一、登山案内 : : : : : 八五
附各地への里程。
- 一、三山巡り : : : : : 八八

- 一、詞林 : : : : : 九〇
- 一、山麓地方 名勝及遊覽地 : : : : : 一〇三
菅原天満宮、下仁田、鷹巣城址、附高崎藩士戦死之碑、松井田、松井田城址、八幡宮、諏訪神社、崇徳寺、不動寺、補陀寺、大道寺駿河守之墓、伊勢義盛屋敷跡、百合若大臣足跡岩、横川、五料、碓氷關址、坂本、碓氷嶺、熊野神社。
- 一、磯部鑛泉 : : : : : 一二五
- 總論 : : : : : 一二五
位置、地勢、氣候、沿革、泉質及溫度、効能、入浴法、ラヂウム鑛泉湯の花。
- 遊覽地 : : : : : 一三四
磯部城墟、薬師堂、仙石遺跡碑、磯部公園、松岸寺、佐々木盛綱の墓、大野九郎兵衛の墓、瀧山、横野の葦、磯部十二景。

産物……………一四六

「ラヂウム」鑛泉湯の花、磯部鑛泉サイダー、齒磨粉原料、磯部煉瓦、鑛泉應用菓子類。

鑛泉旅館……………一四八

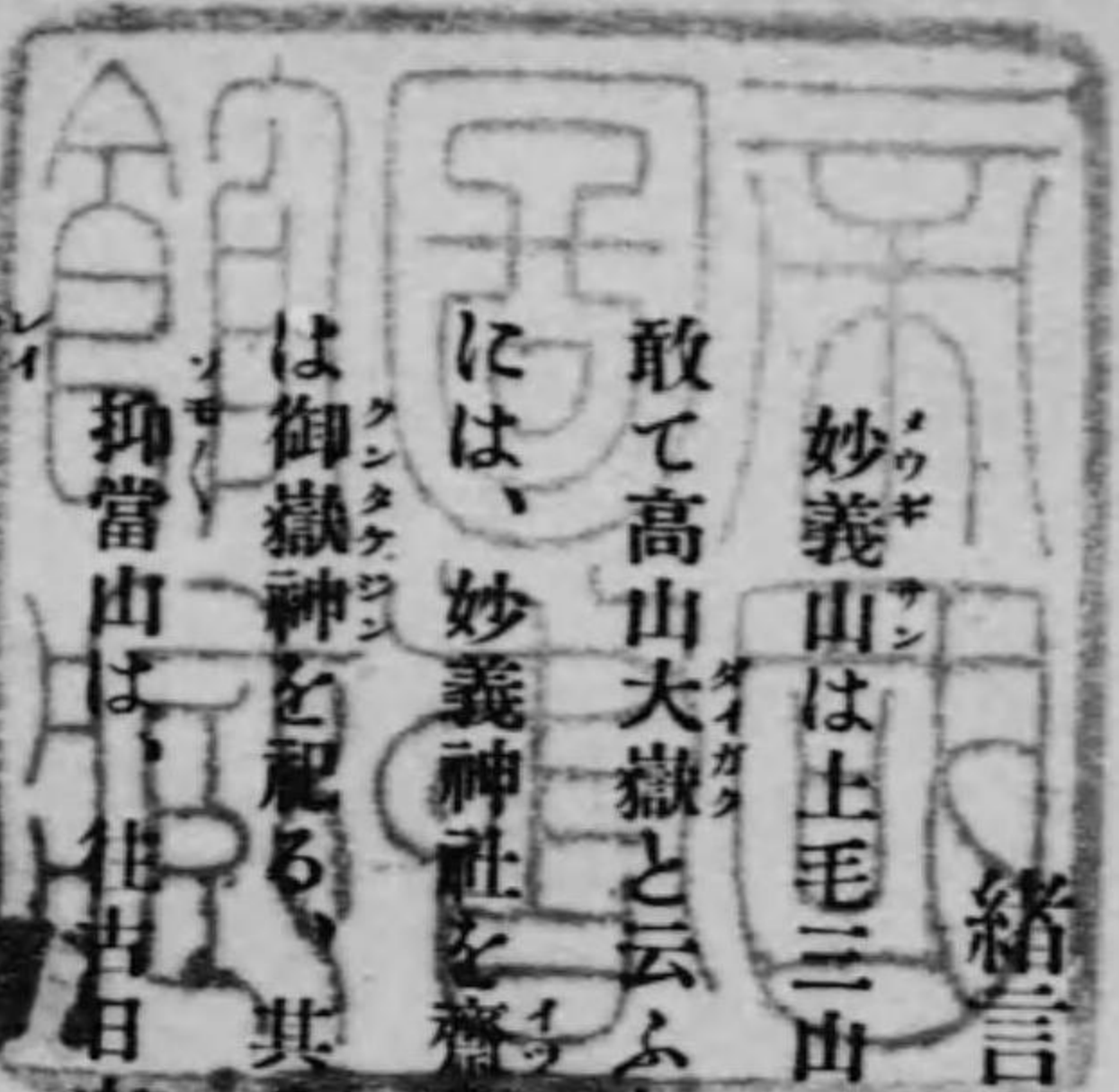
風來館、磯部館、對岳樓、旭館、

上毛 三山 妙義山 目次終

三上毛 妙義山

岩澤正作 著

緒言に代へて



1 妙義山は上毛三山の一なり。山は二郡に跨り、高さ約四千尺。境域約方二里。敢て高山大嶽と云ふを得ず。峯は三峯に分れ、白雲、金洞、金鶏と云ふ。白雲山には、妙義神社を齋き、金洞山は、中之嶽と稱し、中之嶽神社を祀り、金鶏山には御嶽神を祀る、其の最も由緒あるは、白雲山の妙義神社となす。

抑當山は、往古日本武尊、東夷征伐の歸途、登山あらせられ、妖賊を討ちて、靈を此山に留めさせ給ひ、百合若大臣は、此山の一角を射貫きて、世人を驚かし、今にその弓箭と稱するものを残す。弘法大師は、巡錫の途次登山して、利劍持ち

たる異様の^{イヤウ}大國主神の尊像を残し、今尙中之嶽神社^(その後數回改刻したるも、)に奉祀^{ホウシ}す。菅公は、硯水窟の水もて文字を習はせらると傳へらる。以上は口碑傳説に止まり、その事蹟悠久にして、詳かにし難きも、中古尊意僧正此山に留錫し、南朝の忠臣兒島高德も登山したるとか。近古、小田原北條氏の臣加藤長清は、金洞山中に入り、穴居して武を練り、膽を養ひ、不俱戴天の父讎を報じ、宿志を果して、再び此山に隠れて道士となり、不老の術を得たり。長清道士再度の入山によりて、山は開け、神威も滋々^{マスキ}熾に、世人の歸依も彌益に増し、徳川幕府は、妙義神社に社領の朱印を納め、家綱將軍よりは、特旨の奉納あり。又畏くも上野東叡山宮家の御隱居所となり、皇室の崇敬も加はり、長清道士には、僧正位を贈られ、當山の中興と崇められたり。

地主神波己曾神社は、宣化帝の御代の垂跡と傳へられ、古來數々御昇位の沙汰、史上に明かなり。明治維新後、神佛分離令發布せられ、東叡山との關係は斷絶したるも、今に宮家の御殿を残し、妙義神社は、縣社に列せられ、神威は彌榮に榮え在ませり。

元此山は、或火山の一壁を成したるものなれども、多年風雨の浸蝕削磨によりて、切開せられて、皮を破り、肉を裂き、只骨のみを露せり。

妙義三山は、何れも奇岩怪石に富み、殊に石門の奇は、天下第一なり、妙義は、奇山なり。奇を以て著はるとは、我も人も共に謂ふ所なるも、豈獨り奇とのみ言はんや。その山骨を露し、岩角を聳うるは、巖然として、氣骨稜々たる古武士の趣あるを見る。共に削磨の結果に成ると雖も、彼の花崗岩地方の山嶽に見るが如

く、圓顛形をなし、滑脱當世才子の風あると同日の談にあらず。誰か妙義を以て薄片の岩と云ふ。薄片なるも輕佻浮薄の薄片に非らず。薄片なるが故に、遺憾なくその怪をなし、その奇をなすなり。誰か妙義を稱して怪物山となす。その百鬼夜行するが如く、奇態怪形を現はす。これ此山の岩骨稜々たる所以にして、又予が此山に憧憬し、此山を崇仰する所なり。今や世道漸く浮薄となる、此山に登る觀光の人士は、彼長清が臥薪嘗膽の事蹟に鑑み、或は紅葉の美、巉岩の怪、石門の奇等の、直覺感にのみ、憧憬することなく、その真景を觀破し、その真想を極め、造化の妙手を味ひ、以て山靈に應化せられむことこそ願はしけれ。

懸樓聲中景色遷。

摩霄妙義忽當前。

乙羽山人

山如筆架狀奇絕。

駭客古來真不傳。

總說

位置境域 妙義山は上野國北甘樂郡の西北に起り、その北麓は、碓氷郡の西南に亘れる峯巒の總稱で我が上毛の三山中最も西に偏し、中山道松井田驛の西、碓氷峠の東南に在りて北は碓氷川を隔て、鼻曲火山の餘脈に對し、西南は西牧川を隔て、荒船火山に面し、西北は御料谷を界として中木山に接し、東南は第三期層を介して大桁山に連れる臺狀の火山なるも削剝作用に因りて頗る奇景を呈し、人をして一見火山たることを疑はしめてゐる。

今東方中山道より妙義山を望めば全山、白雲、金洞、金鷄の三峯に分れて、略鼎立するもの、如く、その右にあるは白雲山左にあるは金鷄山にして兩山の間

見ゆるものが即ち金洞山で里俗之を中之嶽と呼てゐる。

妙義とはもと白雲山の別名として呼びたるものゝやうであるが、今は衆峯の統名とせられてゐる。

妙義山の占居する地域は、二郡五ヶ町村に跨るも、我三山中最も狭く僅に方二里許にして、その長經三里に過ぎず、その高距も四千尺に足らざるれば大山高嶽の列に入り難きも、古來名山として世に稱せらるゝは、その山容の奇態異狀を呈するによるのである。

成因及變遷 妙義山は、碓氷川の西南部と西牧川の東北部との間に介在する、第三期層に屬する凝灰岩と凝灰質泥板岩層の上に發育したるものにして、その山骨の火山岩よりなり全山三峯に分れて略鼎立する等の事實によりて之を推考する

ときは赤城、榛名の兩山と同様にその中央に存する窪地より噴出して成りたる一獨立火山に非ざるかの觀あるも、仔細に之を觀察するときは一も獨立火山たりし證據を認めざるのみか、反つて或る獨立火山の火口壁の一部たりしものたるに過ぎぬ形跡がある。

今専ら此地方を研究せられたる佐川理學士の說に従へば大略次の如くである。
妙義山の東南にある大桁山は全く一の獨立火山なるも、妙義山はその西北部より西南部に亘りて存する諸山と共になせる一個の火山群である。此火山群の中央に近き處に存在する窪地が即ち舊時の噴火孔である。此噴火孔成立の當初に於ては、今日此窪地を取り圍む峯巒は互に連續してその火口壁を成し、遠く之を望む時は今日の赤城、榛名の兩山を望むが如く完全なる缺尖圓錐形をなしたるに相違

なきも、時移り物替り爆裂作用は幾度か起り山體の諸處を破壊し、生成以來風雨の浸蝕作用は、間斷なく働きて次第に山體を削磨し去りて、遂に今日見るが如き地形と化して、その舊火口壁は數個に分離せられ個々獨立して一見火孔と見做すべき窪地もなく、山容も著しく變化して之を遠望する時は、水成岩よりなれる皺曲山嶽にあらざるかの觀を呈するに至らしめたのであると云ふのである。

火山は一般にその生成當初に於ては、缺尖圓錐形をなして秀麗なる山容を保つものなるが、幾度か爆裂して次第にその山體を破壊し、之に間斷なき剝削作用の加るときは、遂に山體は全く切開せられてその原形を失ふこと、此地方に於て見るが如くである。斯くの如き火山を稱して切開火山と呼んでゐる。

妙義山は即ち切開火山の一にして、今その發達の順序を概言すると、舊此地方

に存在した、一獨立火山の噴火孔の東壁をなしたるもので、所謂外輪山の一部なりしが、此獨立火山は數次の爆裂作用と生成以來間斷なき風雨の浸蝕作用によりて、遂に全く切開せられて當初の火口壁は個々分離して互に關係なきものゝ如くなりたるものである。殊に此の山の如きは、その後尙烈しき剝削作用を受けて、今日の狀態を形成したのである。

妙義山の屬する山群の噴出年代は、今俄にその證徴を詳にし難きも、附近の地質と地形とによりて之を推斷すれば赤城、榛名の二山より稍晩くして、地學上第三紀世の後期に始りしものゝ如く考へらるゝも、その活動力は二山より早く終結して、その後久しく間斷なき風雨の浸蝕作用を受け、その切開を恣にせられて遂に今日見るが如き、奇巖絶壁を呈するに至つたのである。

今妙義山の地貌を概説すれば、三山路同一の水平を保ちて續きたる山頂を有し、此山頂より下にはその山軸の兩側に於て、高さ數十米乃至百米に及ぶ絶壁面が聳立して幅狭き峯頭を作り、その下に又傾斜の較緩にして、種々の方面に走れる小絶壁と、種々の形状をなせる板状若しくは柱状節理をなす岩石ありて、妙義山に有名なる種々の奇岩と石門とを現はしてゐる。此奇巖より上方は樹木少くして諸處に岩骨を暴露するも、以下は岩石の碎屑と土壤とを以て蔽はれ、樹木を密生して秋期錦繡を裝ふ素因をなしてゐる。

妙義山が斯くの如く奇巖怪石を有するは、全く之を構成する岩石の性質によるのである。即ち板状若しくは柱状節理を呈する、輝石富士岩質の熔岩と、輝石富士岩質の集塊熔岩とより成るを以て、削剝作用は自由に之に働きて、或はその一部を削り去り、或はその一部を崩壊せしめて、遂に天下無比の奇勝と變じたのである。

奇峯怪嶽訝神工。 維石巖々氣勢雄。

孰是金鷄孰金洞。

天風吹鶴下中空。

末松青萍

山 嶽

白雲山 その東麓に妙義神社を奉祀して、古來此の峯を妙義山と呼びたるも、今は妙義とは三山の總稱として用ゐられてゐる。白雲山は、妙義町の西方に甚だ急に聳え、妙義三山中の最北に位し、西南は金洞山の支脈に連り、西北は五料谷を隔て、中木山と對し、南は金鷄山に面し、東北は碓氷の流域に臨んでゐる。全

山略三峯に分れ、通俗白雲山の絶頂と呼ぶものを鷹戻しと云ひ、最北に位して、海拔千〇八十一米ありと云ふ。(陸地測量部の測量に依る)その西南にありて、金洞山の餘脈に接するものを相馬嶽と呼ぶ。此の二峯の間にあるものを鼓ヶ嶽と云ひ、共に急峻を極め登攀甚だ困難である。

山軸は略南北に走り、上部の絶壁は東面に最もよく發育して、山骨は殆ど全部集塊熔岩よりなるも、谷の下部妙義神社近傍に於ては第三紀層を露出してゐる。此の第三紀層と集塊熔岩との間に、緑白色にして、泥土様の岩石を介在してゐる。佐川理學士の説に従へば、此の泥土様の岩石は一般に妙義山を構成してゐる熔岩と同質のものなるが、火口内に於て或る變質作用を受けたる後に流出したるものならむと云ふ。又同處に此の層を貫く岩脈がある。其の厚さ一尺許にして岩質龜

裂に富み、その内に方解石を填充してゐる。白雲山を構成する岩質は、輝石富士岩質にして、外觀黒色乃至暗鼠色を呈する緻密の岩塊を包むに、鼠色にして粗鬆なる膠結物を以てし、岩塊は一般に稜角ありて、大さは拳大より人頭大のものが最も多いやうである。

白雲山は妙義三山中最もよく樹木繁茂して、山骨を露はす處少く最も幽邃を極めてゐる。されど尙山腹妙義神社より奥の院を経て山頂に到り、別路大の字に戻る途上鷲の瀧、日暮の瀧(又庚申の瀧)獅子岩、船岩、辨天の岩窟、天狗の評定場、鳩胸、四這、大矢筈、屏風岩、逆下り、犬戻し等の奇勝に富み、眞に一石一巖と雖も奇殆端倪すべからずである。

山頂は平坦砥の如き巖上に石の祠を安置してゐる。

鼓ヶ嶽は白雲三峯中の中央に位し一に天狗嶽とも呼び、山頂最も廣くして又石祠を安置してゐる。

相馬嶽は峯頭鼓ヶ嶽の峯頭に尙一步を擡んで、眺望妙義諸峯中に冠たるもので、峯頂には祠なく唯三角標點を存し、標高海拔一千一百〇三米餘ありて、白雲山中の最高點である。

白雲山探勝案内 妙義神社の裏門を出ると、左側に神馬殿がある。内に石菖蒲を啜せた、木馬と百合若大臣の鐵弓鐵矢と云ふものが納つてゐる。此處から北へ辿り鳥居を潜ると奥の院より頂上に上る道に出る。僅か進めば小流ありて獨木橋を架してゐる。尙進めば一溪ありて鷺の瀧、日暮の瀧(又庚申の瀧)等あれど、瀧とは名のみにして平生は水無き瀧である、又瓢箪穴として岩石に瓢箪を倒にしたやうな

穴、獅子岩、船岩等見て、老樹鬱蒼たる間の急坂を上ること約十町にして大の字巖に達す。大の字は岩石の突出したる上の平面數坪許の處に、岩に穴を掘り三本の柱を建て竹を以て大の字形に組み七五三繩を張り三角に疊みたる半紙を差し込みたるもの、これ妙義神社はもと妙義大権現と稱しければ、大権現の大の字を象りたるものにして、中山道往來の人々に大権現の所在を示したる目標なりと聞く。妙義町より此大の字まで十五町といふ。大の字巖を下り、辨天の窟、天狗の評定場など經て奥の院に達す、此間十町と稱す、奥の院は岩窟の内に石を疊みて神祠を設け石祠を安置してゐる。奥の院より頂上まで尙二十五町ある。登道甚だ峻を加へ鳩胸、四這ひなどの難處を經て漸く頂上に達するのである、頂上は平坦砥の如き大巖石にして、石祠を安置してゐる。四面の眺望亦大に稱すべきものがある。

歸途は別路を経て大矢筈オホヤハスにいたる。峯背の二大巖相對峙トビトイシして矢筈ヤハスの如き狀をなし
てゐる。屏風岩ベウフイハと呼ぶ岩壁ガンベキに沿うて下り逆下りサカサクダ、犬戻しの二嶮ニケンを後じさりに這ハひ
下りて、釋迦ヶ嶽シヤカの前に達し右に龍立の巖窟イソドを見て少し下ると、大の字巖オホノジイハの上方
にて前の奥の院の登路に合するのである。

白雲山の裏山 白雲山の裏山ウラヤマは近年の發見にかゝるので、未だ知る人少きも、
亦見逃し難き場處バシヨである。されば一言附記することにした。女坂メザカの右より白雲山
の東麓トシに沿うて進むこと數町、陣場原ウラバハラと呼ぶ。今は官林カンリンとなりて立派なる杉林で
ある。一溪を亘りて上れば天狗の里宮サトミヤと云ふのがある。これを経て北に進むとそ
の南にある溪谷が即ち白雲山の裏山で、前面に筆立岩フデタテイハ、人形岩ヒトカタイハ、十の字岩ジュウジイハ等の奇
巖ガンを望みつゝ、尙進めば、左方に石割の瀧一名出臍デバツの瀧タキと云ふのがある。此瀧も平

生は稍濕シツひたる岩壁にして、雨降れば初めて瀑となるものにて、その名稱の起因キイン
は岩壁の一線二段となりて臍ヘを出したるが如き形をなすによるのである。これよ
り前方を望めば馬の雙耳サウジを近寄せたるが如き缺岩ヘサミイハ、獅子シシの形したる獅子岩等起伏キフツ
して一步一趣シユを添へ殊に紅葉の美甚得難き所である。右方は即ち横川ヨコカハ、五料等確ゴリウ
氷流域ヒリユクの一部脚下キツカに開展カイテンして、眺望亦頗る優秀イウシウを極めてゐる。尙進みて缺岩ヘサミイハの下
に至れば一大石門ありて、形金洞コングドウの第四石門ダイシシに似て高さ稍低きも横には廣くして、
前方は斷岩絶壁ダンガンゼツベキをなし頗る第四石門ダイシシの南崖ナンガイに似て降ること能はざるも、これを望
めば則ち金洞の裏山にして、幾多イクタの石門シシ様の岩穴イハナと名なき奇岩怪石散點サンテンしてゐる。
左方は白雲山の背側ハイソクにして、屏風ベウフを引き廻マはしたるが如き斷崖ダンガイの上下に種々の形
した奇岩ありて、或は横はり或は峙ツバタてる態サマ、金洞の風致フウチを凌シノぐ趣オモムキあるも、秃筆トクヒツの

能く盡し能はざるを恨とする。

夏山や人語にも似て鳥淋し

秋山の白雲置いて静かな

蛎 魚

金洞山 東方より妙義山を望むとき白雲、金鶏二山の中間に見るを以て、古來中の嶽と呼び、金洞山の稱を得たるは近世の事なりと云ふ。

金洞山は三山中最も西に位して、東北はその一支脈を以て白雲山の相馬嶽に連り、又他の一支脈は東南に走りて金鶏山に接してゐる。

山軸は略東西に走りて、五料谷と漆萱谷との分水界の一部をなし、上部の絶壁は山軸に沿うて發育して、大體に於て又三峯に岐れてゐる。その東にあるものを東元岳と云ひ、西にあるを西元岳と呼ぶ。兩者の中間にあるを中ノ岳と呼び海抜

千百〇四米ありて、妙義山中の最高點である。

山骨は輝石富士岩質の熔岩と、同質の集塊熔岩とよりなるも、熔岩は下部に於てよく發育して、殊に南面絶壁の下部に於ては甚だよく板狀の節理を現してゐる。熔岩は質緻密にして暗鼠色をなすも、上部を構成する集塊熔岩は白雲山を構成するものと、大同小異のものよりなり、共に或は板狀節理を呈し、或は柱狀節理をなして、所謂鬼斧神劃の妙工を極め、人一度此の山中に入れば、奇態怪容一々鬚眉に迫り來りて、殆ど應接に暇あらしめざるの趣がある。妙義の三山は固より何れも奇趣妙景に富むも、就中天工の妙、自然の奇を極めたるは即ち金洞山である。嘗て高崎正風大人は「書く人の筆を巧と思ひしは此の山水を知らぬなりけり」と咏まれたりと聞く。此國風こそ眞に金洞の景致を證し得て餘りあるものである。

金洞三峯の間に二峽谷がある。その東にあるを東山峽と呼び、峽中には四大石門を始めとして、奇岩怪石に富んでゐる。その西にあるものを西山狭と呼び、東山狭の奇勝に及ばずと雖も、亦探勝の價値は十分にある。

西山峽朝日嶽の麓に中之嶽神祠を奉祀してゐる。次に同社社務所所藏の簿冊に記する所の名勝を示せば、

- 大石門 第一石門 穴の高十丈 中八丈 第二石門 穴の高四丈 中一丈五尺
- 第三石門 穴の高八尺 中一丈二尺 第四石門 穴の高八丈 中九丈三尺
- 第五星穴 穴の高十丈 中九丈 第六射貫穴 穴の高五丈 中二丈
- 小石門 東胎内の穴。 女婦岩の穴。 蜂室の穴。 鳥越の穴。 動搖岩の穴。
- 鼓岩の穴。 科戸の穴。 阿波岩の穴。 西胎内の穴。
- 東部の奇巖及勝地 東仙人窟 奥三丈、徑一丈二尺 蛇窟屋 入口より出口まで七間 古屋詰岨 大小三ヶ所

西部奇峯勝景

東山狹橋 蟻の戸渡、鷺の岩、大蠟燭岩、小蠟燭岩、龜岩、筆頭岩、御花畑、虎岩、東大國岩、天狗臺、夜見の岩、大砲岩、動搖岩、身曾貴岩、觀物峯、菅、公硯水窟、御鏡岩。

金洞巖(金洞) 奥八尺 徑一丈、西大國岩、髭摺岩、二見岩、西山峽橋、烏帽子岩、阿波の岩、八丈ヶ岩窟、朝日嶽、(高二百八十尺)、轟岩(朝日嶽) 鞍掛岩、九曲岩、玉綾の瀧、(高十丈餘)。

金洞山探勝案内

妙義神社、石階の下より左折して、白雲山の山腰に沿うて行

くこと數町にして、ナギの澤と呼ぶ溪谷に會す。數個の集塊熔岩塊ありて、その間に不動瀑と呼ぶ小瀑布懸り、岩頭に不動の石像を安置してゐる。これより尙數町杉林つきて赤坂と呼ぶ小坂を下り、數町にして選種園に達す。(名物葡萄酒、梅酒、羊羹等あり) 新前にありては、この道は信州裏街道として交通繁く、今の選種園のある處にお仲茶屋と云ふ茶店ありて、通行の人々は往來の途次此の茶屋に憩うて、澁茶に渴

を醫したるものであつたさうだ。

選種園は白雲、金洞、金鶏三峯の間にある窪地で、これより小坂を上り梅林の附近より白雲山を回顧すると、白雲の絶頂と稱する鷹戻しは右端に聳え、次に天狗嶽の餘脈なる鼓落を起し、その下に障子岩と云ふがある、障子岩の下にかたまれるが如き形をなすものを猩々岩と呼んでゐる。鼓落の左に聳ゆるものが相馬嶽である、相馬嶽の左側をバラオネと呼び、その左の凹處が白雲、金洞二峯の境界である。此凹處の左に聳ゆるものが金洞山の絶頂なる中の岳で、相馬嶽より高さこと約一米、海拔一千一百〇四米ありて山中の最高點である。その東にあるものは東元岳の東側である。又左方金鶏山を望めば右端に大黒岩ありて、次に筆頭岩、子持岩、劔ヶ峯、挟み岩(三個の薄き岩石の並立するを見る)、氷室ヶ岳と連り、左端に聳立するものが

金鶏の絶頂である。梅林の傍より少し下ると姥の澤と呼ぶ小溪がある。その左側に集塊岩の大塊ありて、その南腹に一小岩窟がある。此小溪を超えて雑木林の間を上ると、地藏ヶ窪と云ふ小平地がある。平地盡きて坂路となる、俚俗これよりへコタレ坂と呼ぶ。曲折したる坂路を上げば、東南に開展したる處に達す、此處を見晴峠と云ふ。これより金鶏山を望めば大黒岩隠れて、右端に筆頭岩聳え、子持岩、劔ヶ峯、挟岩、氷室ヶ岳、頂上と順次連れるも、挟岩は一岩隠れて二岩のみ認められ、頂上の下に所謂金鶏の風穴(或書に又百合若大臣射貫岩と云ふとあれども誤、射貫岩は中山道にて見るべく全くこれとは別物である)と呼ぶものが見られる、見晴峠より集塊岩の溪中に入る。此處を馬返しと呼びてこれより石礫礮礮として坂路大に曲折してゐる。これを七曲峠と呼ぶ。その中間蛙石と云ふ邊より、右側金洞山の半腹を見上ぐれば、根生岩と呼ぶ異様な岩石

聳え、その左方に指差岩ユビサシとして、根生岩を指示するが如き形してゐる。(此二岩を二見岩とも呼ぶ)七曲峠ナ、マガリトウゼを上ると左方に金鶏の筆頭岩と挾岩エイセンエンスイクイが鋭尖圓錐形をなして峙立ジリツするを見る。一町餘にして有名なる一本杉イツボンスギに達す。路傍金洞舎コンドウシヤあり。亭を見晴亭と呼び展望テレンバウ甚だ豊ユタカである。(中之岳略圖、繪端書、寫眞等あり)金洞舎の後には金鶏の筆頭岩と相對して燈籠岩トウロウイハがある。中の岳路を進むこと一町許にして回顧すると前記燈籠岩は形を變じて夫婦岩トウメとなり傍に仲立岩ナカダチ、恵比須岩エビス、東仙人の窟イハヤなど並列してゐる、更に一町許にして右側に一屋(金洞舎舊屋敷)ありて屋後に壁立してゐる巨巖キヨガンを屏風岩ベウフと呼び、その裾の少しく上りたる處に菅相丞クワンシヨウシヨウの硯水窟ゲンススイクツと呼ぶものがある。穴は巾僅に三寸許常に清水タ、を湛タ、へてゐる。屏風岩ベウフイハを廻り左に轉ずると第一石門キゼンが毅然として聳えてゐる。第一石門を入れればその背後より右へかけたる嶂壁シヤウヘキを禊岩ミソギ、左方に臺チユクとして峙ツバタつ

のを達磨岩ダルマと呼ぶ。(これ第二石門の側壁なり)岐路キロを達磨岩に向つて上れば數十歩にしてその裾スツに達す。第二石門はその中腹にあり。その岩腰に架けたる鐵鎖テツサによりて横這ヨコバひに登る處を蟹カニの横這ヨコバひと呼び、次に縦這タテバひと云ふを攀コちて漸く門口を潜クれば其處に釣瓶ツルベ下りと呼ぶ難處ナンシヨがある。數丈の岩壁を鐵鎖テツサにすがりて下るのである。

今第二石門の門口に立ちて回顧クワイコすると、前面に禊岩ミソギイハを望み、その上に堺岩サカヒ(東山峽の界)と呼ぶ一大嶂壁シヤウヘキがある。堺岩ミソギと禊岩ミソギとの裂目サケメには幻岩マボロシ、その右手に鼓岩ツツミがある。又第一石門の左には屏風岩ベウフの頂なる二見岩フタミイハと鏡岩カミイハとを望み、直後には脚下セキジユンり石筍セキジュンの如く衝ツき立ちたる大蠟燭岩ラウソクを望み、大蠟燭岩の上には虛無僧岩コムフウイワと呼ぶ一孤岩コガンが聳立シヨウリツしてゐる。尙此等諸岩の上方を遠く望めば第四石門、武尊岩ブソン、天狗テング臺ダイ一帶の諸岩が望見せられる。第二石門を潜クり釣瓶ツルベ下りサガを下り、大小蠟燭岩の間

にある片手サガリと云ふ難處を下り、少し上りて左折すると其處に第三石門がある。穴を透して前面を望めば、虎岩と呼ぶ巨巖ありて、將に飛躍せんとするの勢を示してゐる。歩をかへして少しく上れば第四門に達す。その右柱の南端に廻れば第一石門、第二石門を初め東大黒岩、虛無僧岩、大小蠟燭岩、幻岩、屏風岩等脚下に各特徴の風采を現はすを見、仰げば金洞の三峯威容儼乎として衝立するを望み、眞に奇絶又壯絶を極め、心神恍惚として時の経過するを忘る。されば里人此處を日暮の景と稱してゐる。門口より前面を望めば天狗臺一帶の奇岩列りて、その左端にあるは龜岩、右端にあるは動搖岩、中間にあるは大砲岩である。第四石門を下りて又少し上れば武尊岩に達す。僅か右に廻れば二岩の裂目より谷底を俯瞰するを得。これを武尊の硯と呼び、第一石門及第二石門とその附近の諸岩と

を望み、少しく首を上げれば、東元嶽及び東元嶽の獅子口を初め附近一帶の景致を望見し、尙遠く眼眸を放てば、上武一帶の平野の開展するを見る。これより戻りて前進すれば、巨巖の前途を遮るものありて鐵鎖を懸く。これ舊、蟻の戸渡りと稱せし處なるも、往年黒田清隆伯此處まで來りたるも、恐れて進むこと能はざりしより、爾後黒田の泣岩と改稱したるもの、但し當時に在りては鐵鎖を懸けざりしも、今は鐵鎖を懸けたれば四拙の如き臆病者も談笑の間に登り得て、泣かずにすむのである。此處を登りて左折すると幅約一尺許、長四五尺にして兩側は絶壁をなす東山峽の橋あり。之を亘れば即ち天狗臺で、その上に峙つ岩が龜岩である。龜岩の裾に胎内潜りと呼ぶ石門がある。石門の手前に親不知、子不知と云ふ難處がある。天狗臺より龜岩の右に廻り親不知、子不知の難處を過ぎ、胎内潜りを抜け

て戻り再び山狭橋を渡り南に進めば、右手に天狗の投石あり、次に大砲岩がある。鐵鎖により昇ることを得。その先に動搖岩がある。岩腹より鐵鎖に縋りて下ることを得。其處に飛根の松と呼ぶ一株の松樹ありしも、大正五年遂に枯死したるは甚だ嘆惜すべきことである。(これ登山の人々が樹皮に記念の姓名を彫り附け、或は杖等を折りたの多きは嘆ずべきである。兎角邦人の公徳心の乏しく名勝を毀損して顧みざるもの

飛根の松から尙一縷の狭路がある。其處を蟻の戸渡りと呼び、その端が天狗の評定場で、路は此處に盡きてゐる。第一石門より天狗の評定場に至る距離は、漸く五町許りなるも、随分難所も多く勝地も多ければ、探勝の人々は案内者を附せらるが安全で、且得策である。歸途は第四石門を過ぎ、第三石門との中間から左に下り、小蠟燭岩の傍を過ぎて、第一石門の前に戻る路がある。此間約四町許あ

る。

以上は東部の景勝である。更に西部の景を探るには第一石門を潜り、禊岩を廻りて進むと平地に出る、其處に中之嶽神社の社務所がある。社務所の前を過ぎて進むと、突き當りに大黒の神祠がある。祠前を右折して石階を上ると、中之嶽神社を奉祀してある。祠後に轟として聳えてゐるのが朝日嶽である。祠側を左に廻れば右側崖下に長清道士の碑がある。尙進むと葛籠岩が崛起して朝日嶽に連り、その傍に鞍掛岩、法螺貝岩など呼ぶものがある。葛籠岩と鞍掛岩との間を上り右折すると石祠がある。行く手は幅狭き岩で其處が西山狭の橋である。之を渡ると鬚摺岩と呼ぶ兩岩迫りて幅狭き岩壁の間を潜りて上ると、鐵梯を掛け又鐵鎖を懸けてある。これを上ると即ち朝日嶽の頂上で此處を一名轟岩と呼んでゐる。是れ

先年第十五聯隊附の百々力某なる少壯士官が、此處で逆立したるによると云ふ。今此處に躡して金洞の主峯に面して、左より指呼すれば西大黒岩、葛籠岩、仙人岩など列り、右に轉ずると八丈岩、大佛岩、鳥越岩、二見岩、東大黒岩などあるが、以上は唯名のつきたるものゝみにて、尙無名の奇岩が澤山ある。東山狭に比して眼界は開けて、遠望の稱すべき所がある。

歸途は登路を戻るのであるが、尙金洞の頂上を極めるには葛籠岩を左にして北に下り、東に上ること數町、右に八丈岩がある。その中腹に長清道士が籠居した八丈窟がある。登路は漸く勾配を増して甚だ困難を極め、八合許りの處に至ると前面に蟻壁ありて前途を塞いでゐる。左に廻ると二ヶ處に鐵鎖を懸く。これによりて上り少しく峯背をつたひて漸く絶頂に達するのである。此處が妙義全山の最

高點で、海拔一千百〇四米と稱する處である。左れば此處より俯瞰すれば、中之嶽神社社務所を初め、東西兩山狭の奇巖、石門は盆景の如くに躡踏し、仰げば、近くは荒船、黒瀧、稻含の諸山を初めとして、甲信の諸嶺と淺間の雄姿とを望み、鑄、碓氷の二水又銀蛇の如く蜿蜒たるを見る。絶景唯憾らば之を形容するの文字に乏しきを。

夏山の風穴に笠吹かれけり

鐵梯を續ぐに鐵鎖やはた、神 蛭 魚

金鷄山 妙義町の西部小坂村の北部にありて、大部分妙義町大字菅原の地内に屬し、その西北麓は金洞山の支脈に接し、北は白雲山に對し、南は一溪水を隔てて大桁山を望み、最高點は僅に海拔八百九十一米に過ぎざるも、その位置三山中

の最南にあるを以て、山頂は眼界大に開けて眺望に富んでゐる。

山骨は白雲、金洞の二山と同じく、熔岩と集塊熔岩とより成り、熔岩は下部に位して、肉眼的斑晶を示さざる暗鼠色にして緻密なる岩石である。此熔岩は、白雲、金洞二山のものより異り變朽富士岩質に屬すと云ふ。上部は輝石富士岩質の集塊熔岩にして、頗る輝石粒に富み、黒色乃至暗鼠色をなしてゐる。此集塊熔岩の霉爛したるもの、内を探る時は、輝石粒の完晶を蒐集し得られる。

金鶏山は、東部南部西北部の三方に支嶺を岐出して、諸戸谷と菅原谷と上小坂谷との分水界をなし、その東部に向ふものは、頂上より急下して吾妻屋山を崛起し漸下して平野に終り、南部に向ふものは、杉木峠に至りて大桁山の支嶺に會し、西北に向ふものは頂上より氷室ヶ岳、劔ヶ峯、筆頭岩と漸下して一本杉に至り、

金洞山の東南麓に會し、此方面に於て最も奇景怪容を極めてゐる。山中の奇巖勝地を列記すれば、

筆頭岩(天燭岩)、子持岩、挾岩、劔ヶ峯、氷室ヶ岳、風穴、帆立岩、蟹の四道、乾瀧、馬の脊渡り、
親不知、鞍マタギ、頼摺り、山狭の橋、髭摺岩、

金鶏山探勝案内

妙義神社石階の下より左折し、禰宜町の端れなる升石と云ふ處より左折して下り、ナギの澤より來る小流を渡り、數町にして庚申塚がある。數十歩行き左折して吾妻屋神社路に就いて進むこと一町許、木戸川と呼ぶ小流を渡り、上ること數町にして吾妻屋神社の鳥居がある(妙義町より約十町許あり)左折して下ること約一町、右に折れて上ること數町、鳩胸と云ふ處を下り、一小流を渡り南に進むこと數町にして菅原よりの本道に會し、右折して進むこと三四町にして御嶽神

社に達す。數年前迄は祠前に茶店ありて休憩キウケイに便なりしも、先年取拂トリハラはれたれば休憩の便を缺く。祠前の木標に東、村道及松井田方面。南、菅原神社。西、中之嶽を経て妙義神社。北、登山道とあり。各地への里程は妙義町一里、一本杉中之嶽神社へ各一里菅原神社へ十八町、金鶏の頂上迄往復約二時間と稱してゐる。祠前より北に進むこと約一町不動堂がある。石橋を渡れば上流に二三段の小瀑布セツパクの懸るを見る。尙一町許上ると等身トウシンの銅像（像は中澤駒吉と云ふものにして此山路を開きたる人なりと云ふ。）がある。これより御嶽山といふ額ガクを掲げた鳥居を潜り少し上れば、不動尊と和歌の神と呼ぶ東帯タイの銅像とありて、路傍に二抱許の松樹がある。路は峯背に通じて處々に石神、石佛を安置してゐる。五合目と六合目との間に帆立岩ホウタテイハと呼ぶ岩が崛起してゐる。その南腹を廻りて少し上れば、眼界大に開けて近くは荒船アラフネ、黒瀧クロタキ、稻含イナフタミ、御荷鉾ミカボ

の諸山より、遠くは武甲信の連山サウゴウ雙眸の中に入りて、眺望絶佳なる處を見晴と呼んでゐる。尙進みて七合目半に至れば、巉岩ザンガン壁立して約六十度許の勾配コウバイをなす。岩質は集塊熔岩にして岩塊隆起リウキして疣状イボヂヤウをなしてゐる。此の疣状の岩塊を踏み、これにつたはりて上るのである。此處を蟹カニの四這ヨツバと呼び此處を上ると乾瀧ヘタキと云ふ難處がある。鐵鎖にすがりて上れば馬の脊渡りウマノセワタリとて、左は乾瀧ヘタキで絶壁をなし、右も亦絶壁をなしてゐる。次に親不知、鳩胸、鞍マタギ、頬摺り岩ホウズリイハを過ぎて山狭の橋を渡り、髭摺り岩ヒゲズリイハを越えと御嶽神東帯ミツタキの石像がある。三十間許進むと一大岩ありて上に御嶽神社と記した石碑セキヒを建つ。その東方二十間許の處に三角側量點サンカクククリヤウアンがある。此處が頂上である。これより西北一本杉に向つて岐出キシユツする支脈シメヤクを望めば處々に奇巖聳立して、その絶端に峙立するものが即ち筆頭岩で、次に氷室ヒツムの岳聳

え、その西南に離山と云ふがある。挾岩、劔ヶ峯等は不明である。頂上より此支脈を峯傳に、筆頭岩に達する峽路あれども、甚だ峻険にして冬季落葉時に非らざれば容易に通過し難ければ、歸路は頂上の大岩塊の南腹にある金鶏の髭摺りと云ふを廻り右折して下り、蟹の四這ひの下に出て●登路を下るのである。(蟹の四這に輝石の結晶を蒐集し得。)

金鶏山の頂上を極めて御嶽神社に下れば、祠前より西に上り郷の塔と呼ぶ坂を上り、羊腸たる徑路を昇降すること十數町にして、小坂村より中の岳に登る本路に會す。これより小坂川の支流を二回許り渡ると開墾地に達す。此邊より北方金鶏の支嶺を望めば、子持岩の形最も眞に迫り、人をしてその名實のよく伴へることを想はしむ。少しく上ると人家二三あり。前面金洞の鏡岩を望めば二玉の如き

形をなしてゐる。尙だら／＼坂を進むこと數町にして、中之嶽神社社務所に達す。

筆頭岩 金鶏山の西北支脈の突角に矗立して、一に天燭峯と呼び、これを東側より望めば恰も筆頭状をなすも、西方より望むときは幅廣き鋭尖圓錐峯をなしてゐる。一本杉の見晴亭の側より下ること數町にして、其麓に達す。麓より頂上まで僅に八町を出でざるも、道路頗る峻峻を極め登攀甚だ困難である。まづ羊腸の如く蜿蜒たる坂路を東に廻り、岩面に隆起せる疣状の岩塊や、木の根蔓葛等に頼り漸くにして、攀ち上れば鳩胸と云ふ大岩突出してゐる。此處は足の踏み場も、手の掛け場も殆ど無ければ、岩面に抱へ附くやうにして登るのである。此の難處を越えると頂上である。頂上は金洞の屏風岩、天狗臺一帶の景致等咫尺の間に迫りて、手を延せば將に觸れんかと思はるゝ程である。又左を見れば慈母の赤子を

負ひたるが如き形せる子持岩ありて、景致甚だ佳なるも巖頭峻嶮にして、氣沮み魂動き冷汗背に満ちて、眺望を恣にするもの甚だ稀である。

頂上や秋晴に立つ我小し

雲間もる日に谷深き紅葉哉

蛭 魚

河 川

妙義地方に於ける河川は、その山腰の一部を劃繞する碓氷、西牧の二川と、山腹の溪水を集めたる五料川、小坂川、高田川(一名妙義川)等主なるものなるも、此地域の地貌に著しき影響を及ぼす程のものにあらず、されども先づ順序として次にその大要を記すことにした。

水源を妙義山外に發して山腰の一部を區劃するもの

碓氷川、碓氷峠の東溪に發源して横川驛の南に於て衆水相會し更に五料川を合せ、白雲山の東北麓を流れ安中驛に至り、後閑川を入れ、豊岡村を経て烏川に會してゐる。流程は水源地より約十里許ある。

西牧川 鎬川の一支源にして、荒船山の北に連る上信兩州分水界の諸溪水を集め、東南下して下仁田に至り、南牧川と合して鎬川となる、その流程は凡五里餘りある。

水源を妙義山中に發して所謂副射谷をなすもの

五料川 妙義山と中木山との間にある溪中に發し金洞、白雲二山の北部に於ける副射谷の水を集め、白雲山の北麓字中木に於て碓氷川に會してゐる。

小坂川 金洞山南部の副射谷を集め、漆萱谷を経て上小坂に至り、金鷄山西部

の溪水を合せ、中小坂に出て南流して西牧川に入る。

高田川 本流は杉木峠及び金鶏山南部の溪水を集め、大字諸戸に至り金鶏山東部と、白雲山南部の溪水を集めたる諸戸川を入れ、更に行澤に至り白雲山の東南部より来る妙義川を合せ、東南に向つて流れ高田村を経て鍋川に會してゐる。

谷に咲くあやしの花や閑古鳥

蛭 魚

生物界

妙義山に於ける動植物の分布につきては、多少調査したる處あるも、都合により他日重版の時に譲り今は著名のもの數種類のみ、記載することにした。

佛法僧 鳴禽類に屬し、鳥形鴿に似て稍や小さく、嘴細くして脚と共に赤く、羽毛は一體に濃綠色なるも、翼と尾とはその端黒く、雄は頭部淡黒色をなしてゐる。

る。元來熱帶地方の産なるも、候鳥にして夏季は内地に來りて深山に棲む。その鳴き聲の佛法僧といふが如く聞ゆるによりて、佛法僧又は三寶鳥など呼びて、古來靈鳥として尊ばれてゐる。

通念佛集に、佛法僧と云ふ鳥は靈窟閑林の中にて、曉方一夏の間鳴くなり。雄、佛法と鳴けば、雌、僧と聲を合すなり。雅路記に、佛法僧は鳥に似たりとも見ゆ。夫木集に、次の三首を載せてゐる。

我國は御法の道の廣ければ鳥も唱ふる佛法僧かな。

鳥の音も三の御法を聞かすなり深山の庵の明方の夢。

松の尾の峯靜かなる曙に仰ぎてきけば佛法僧なく。

慈 圓

家 隆

光 俊

亦「憂きことを聞かぬ深山の鳥だにも鳴く音はたえな三の御法に」と咏まれたるも、此鳥のことである。敢て曉方のみ鳴くにあらず、初夜の頃より曙かけて鳴き、また霖雨のとき、霧深き日には、晝にても妙義神社や、中の岳の社務所附近に來て鳴げど、里人は如何なる鳥かその形を見ずと云ふてゐる。

十一位鳥 ジライチ その鳴き聲の十一と呼ぶが如く聞ふるによりて名け、又ジジンチヨウとも呼んでゐる。蓋日光山の名鳥、慈悲心鳥の轉化したもので、所謂日光の慈悲心鳥は妙義の十一位鳥である。

鳥形は鶇ヒヨドリに似て、背部は鼠色をなし、胸腹部は淡赤茶色を帯び、下尾筒は白く尾羽は灰褐色をなし、數條の黒帯を備へてゐる。此鳥も夏季内地に來りて、深山に棲む候鳥である。

當山の傳説に、往昔十一歳の小兒山中に入り、死して鳥と化したるものあり。此鳥「ジユウイチ」と鳴き、己が年を呼ぶと云ひ傳へて、里人は今に十一歳の小兒の登山することを、忌みはゞかつてゐる。

右の外尙鳥類には、ホト、ギス、ウグヒス、カケス、キツツキ、キヂ、ヤマドリ、ハト等の外に種々の鳴禽類も少くない。

鼯鼠 ムサヒ (一名オカッキ) 哺乳綱中齧齒類に屬する畸形動物で、體形兎ウサギに似て灰褐色をなし、頬部に白斑を具へ、耳殻ミミ小く尾長くして長毛を密生してゐる。前後兩肢の間の皮膚は延びて、蝙蝠カハホリの如く膜状をなし、これを擴げて樹より樹に飛び移つるも、低所より高所には飛び移ること能はず。通例老樹の洞穴などに棲息してゐる。

モモンガ (一名ノアスマ)、ムサ、ピと同屬の獸類で、體形ムサ、ピに似たれども、遙かに小さくして、頬部に白斑を具へず。深山の杉林又は老樹の洞穴等に棲み、或は小鳥の巢を奪ひて巢となし、晝間は潜みて出でず、夜出て食をあさる。古來ムサ、ピと混同し共に魔物視されて、恐れられてゐた。

金襴子 カシラ 又河鹿とも書き、兩棲綱中無尾類(蛙)盤指類ベシシに屬し、形「アマガヘル」に似たるも、後肢の跗蹠骨長く延びて、一節多きを特長とする。魚類中杜父魚又「カ

クブツ」と呼ぶものと、同名にして共に谷川に産するので、往々混同せらるゝが、金襖子は清き溪流に棲みて、初夏より中秋頃まで美聲を發して鳴き、その聲の鹿に似たるより名くと云ふ。彼の「今日もかも明日香の河の夕去らずかはづ鳴く瀬の清くもあるらむ」とあるは金襖子を歌ふたものであらう。

面白の瀬音す河に河鹿がな

榎 籬

河鹿聞く霧の端居の寝衣かな

十 歩 老

河鹿飼ふ大水盤や苔の石

田 士 英

等はよく河鹿の趣味を解した句であるさうだ。當山は水に乏しきも、金洞山の中の岳神社より金鷄山に至る途中、小坂川の支流に於て初夏の候、老鷲の音と共に聞かれる。近年妙義神社の社務所内の池中に放ちたるもの、漸く繁殖して年々清冽なる鳴聲を放つさうである。

以上の外に動物中稍々珍とするに足るものは、陸産貝類中「ヤマタニシ」「コヤ

マタニシ」「ケマイマイ」「キセルガヒ」等を産し、蠕形動物に「カウガヒビル」を産するも、人畜に吸着して血液を吸収する「ヤマビル」は見受けぬやうである。次に盆養するに足る植物數種を記載して、その培養法の大要を記すことにした。

コイハザクラ

櫻草科に屬する宿根草にして、赤城山の「エキワリサウ」と共に

珍とするに足る植物である。高さ二三寸に達し、短縮せる莖は、二乃至五枚の根生葉を出す。葉柄二寸内外にして、傾向した赤色の毛を密生し、葉片は圓狀腎形をなし、縁邊略七個に淺裂して、各裂片は又鋭尖乳頭齒ある三片に分れてゐる。これ等の齒頭は皆葉脈の終るところである。葉脈は低部に近く二側脈を出し、下部のものは少しく縁邊に沿うて走り、更に三分して稍掌狀脈の觀をなしてゐる。葉面は柔毛密生し、花時は小形なるも、成長すれば長さ七八分、幅一寸内外とな

る。五六月頃花莖を抜き、頂端に三四花を繖形に着く。花莖も葉柄の如く毛を生じ、總苞片數個あり。萼は五裂し、花冠も五裂して深紅色を帯び、裂片は倒卵形をなし、先端に三角狀缺刻ありて、櫻の花弁に似てゐる。産地甚だ稀にして、箱根山の火口丘なる駒ヶ嶽は、有名なる産地である。當山にては白雲山の鳩胸附近の絶壁に僅に存在して、甚だ採集に困難である。

これを盆養するには、泥炭土四分、眞土と砂を等分にした、培養土に植ゑ、一度給水して乾燥せしめぬやうに注意し、夏は涼しく冬は暖かに保ち、殊に夏季は半陰の場所に置くこと肝要である。初冬より温室中に入れて培養すれば、ユキワリサウの如く、正月の床飾りとなる。

ウメバチサウ

(一名バイクワサウ)

虎耳草科に屬する多年生草本にして、高さ六

七寸に達す。數個の根生葉を叢出して一株をなし、葉は長さ葉柄を具へ、葉心臓狀圓形をなし、葉脈は稍平行狀をなしてゐる。夏季花莖を抜き、その中間に一個の抱莖葉を着け、頂端に一花を開く。花は綠色の五萼片と、白色の五瓣片とを有し、花瓣は卵圓形をなす。雄藥五個あり、別に五個の假藥を具へ、各假藥は篋形をなし、末端絲狀に細裂し、絲頭に黄珠を載せてゐる。一雌藥あり、花柱なく、柱頭四分してゐる。各地に産し珍種にあらざるも、花形梅花に似て、風姿雅趣に富み、盆養に可なるが故に此處に記することにした。

早春採集して、泥炭土、眞土、砂を等分にした、培養土に植ゑ、簞下にて培養すればよし。日光に直射せしめると、開花季迄に葉を損じて見榮を失ふ。肥料は油粕汁の稀薄なものを、月二三回位施してよし。サワラン、トキサウ等と混植す

れば妙である。(單植より混植の方容易である、ウ) 秋季取播すればよく發芽する。(メガササウミの混植も面白し。)

エゾスミレ (一名エイザンスミレ) 堇菜科に屬する多年生草本にして、二三寸より四五寸に達し、二乃至五六個の根生葉を叢出する。葉柄長く、葉身は通常三裂して、各裂片は缺刻齒牙を有す。花は普通のスミレに似て遙かに大きく、距も長くして、本邦産の堇菜類中最も強き芳香を放ち、花瓣は淡紫色のものと、白色のものがある。

盆養法は實を取播きにするか、秋季採集して、前記の培養土を以て植ゑ、暖き處に置けば福壽草と共に正月の飾りとするを得。(花後は陰地に移し置くべし。)

カタクリ (一名カマコユリ) 百合科に屬する宿根草にして、早春地上に二葉を出し、その間に花莖を抽き、紫色六片より成れる美花を下垂す。葉は厚くして、表

面に紫斑ありて、長楕圓形をなす。花蓋は淡紫色にして外轉し、内部に通常矢羽形の斑紋がある。地下深き處に根莖ありて、多くの澱粉を貯へてゐる。これを取りて片栗粉となす。

盆養法は、花後採集して、一般球根類と同様に貯へ、秋季コサクラサウと同様の養土を以て植ゑ、注意して温暖なる場所にて養へば、正月の飾りとする事を得。鉢は稍深きものを用ゐ、時々薄き油粕汁を施用する。植ゑ込みの時、他の球根類同様腐熟した厩肥を用うれば一層妙である。

キミカゲサウ (一名スマラン) 百合科に屬する多年生草本にして、地下莖より二個或は三個の長楕圓形の葉を出し、五六月頃葉間より花莖を抽き、白色短鐘狀の小花を總狀に下垂し、その形鈴に似て愛らしく、強き芳香を放ち、香水の原料と

なる。

これを盆養するには、秋季注意して根莖を採集して、泥炭土と眞土と砂を等分に混じたものに植ゑ、發芽後時々稀薄な油粕汁を施せばよし。秋末より温室にて培養すれば寒中開花せしめられる。(キミカゲサウは、幸福の再来と云ふ意味の花言) 葉ありて、歐米人には殊に珍重されてゐる。

クマガイサウ 蘭科に屬する宿根草にして、高さ一尺内外に達し、莖頂に扇子を開きたるが如き、濶大なる二葉を對生し、五六月頃その間に花梗を抽き、大形の花を頂生す。花は紫色にして、濃紫色の斑點がある。旗瓣は囊狀をなし、熊谷が背負ひたる幌に似たるより名くと云ふ。

盆養法は 秋季注意して採集して、前と同様の養土を以て植ゑ、發芽後は半陰の場所に置き、時々薄き油粕汁を施し、花後は半陰の土地に下して、肥培するこ

と肝要である。

(此植物は比較的培養し難きも、次の「アツモリサウ」と混植すれば、何れか必ず枯るゝなど云ふは根據なき説である。)

アツモリサウ 花形クマガイサウに似たる、蘭科の宿根草にして、高さ一尺内外に達し、四五枚の鋭尖卵形葉を互生し、各葉は脚部を以て莖を抱き、五六月頃莖頂に一花を着け、形前種より優美である。

盆養法はクマガイサウに準じてよし。

セキコク 蘭科に屬する多年生草本にして、岩上古木等に着生し、白き氣生根を垂れて、大氣中より養分を吸収す。莖は三四寸に達し、明瞭なる節を具へ、一見木賊に似たるも、節毎に葉を出し、葉は狹長にして大ならず。六月頃花を開き花は通常二個宛叢生し、白色又は帶紅白色をなしてゐる。

培養法はヘゴ等に苔附にするか、或は鉢に水苔を盛り、新しき氣根の下垂し得

るやうに植えて、スシメ簀下等にて培養すればよし。

ウテウラン 蘭科に屬する宿根草にして、岩石の裂隙レツケキ或はイハマツ等の中に生じ、莖長二三寸に達し、通常二三枚の線形葉センゲイエフを出し、葉の裏面ウラシに數條の紫線シセンを具へてゐる。夏季莖頂より花梗を抽き、紫色の小花を總狀サウヂヤウに着生し、甚だ可憐な植物である。

盆養法は球根をイハマツの根株等ネカフに植ゑ込めば最も妙である。

上記載したるもの、外に、尙ほ普通に採集し得らるゝものに、サクラサウ、ウメガササウ、イハタバコ、フタバアフヒ、ヒメイチゲ、ダイモンジサウ、シハイスミレ、イガリサウ、エンレイサウ、マイヅルサウ、エビネラン、スワラン、フエノハナワラビ、ミヤマウラシロ、シ、ガシラ、クジヤクシダ等は何れも盆養

の價値あるものである。殊に常山に有名なる、「メウギシダ」なるものあれども、フヘンテキ普遍的のものにあらざれば、今はこれを略して置く。

シロガネ白銀の小すゝ聯ぬる鈴蘭や揺らば鳴るべしその音さやく

ウバ山姫の髪華にこかもよ塵すゑぬ清き谷間のすゝ蘭咲けり

村上 蛸魚

妙 義 町

妙義町

クロモシサカ黒門坂を上りて一町餘左側に、農商務省山林局妙義森林測候所がある。

その門前に建てられたる、木標モクヒヤウの示す所によれば、北緯三十六度十八分、東經百

三十八度四十六分、海拔千四百一十一尺とある。以てその位置と高距を知るに足る。

（是より妙義神社）今は北甘樂郡に屬して妙義、丘、大手、行澤、諸戸、菅原等と合併

して、妙義町大字妙義町と云へど、本國帳に碓氷郡波己曾明神と載せしもの、諸

戸に存する所より考ふれば、往時は碓氷郡の管する所たりしものか。維新前は信州善光寺への裏街道に當り、一名女街道と呼んだ。それは表街道の横川に幕府は關所を置いて、婦人の通行の八笠しかつたので、自然此の裏街道を妙義に出て、元宿から信州の岩村田に出たのである。又三峯詣の人々は妙義から吉井に出て、鬼石に一泊したので、獨り妙義參詣者のみならず、通行の人々も此處に宿りたれば、甚だ賑ひて戸數は二百戸餘もあり、旅館十戸、妓樓十數戸もありたれど、維新後、妙義神社と東叡山との關係絶えてより、漸次衰頽したるも、妓樓廢止當時は尙八戸を存したりといへど、今は僅に往來の兩側にその殘礎を認むるのみである。又神社の石階下から中の嶽道の竹藪のある邊を、今でも禰宜町と呼ぶが、此處は維新前に御師即ち祝家の在つた處である。町は妙義神社の社領に屬し、町の入

口には三ヶ處に門を構へてゐた。大門は富岡通りで、茲に白門を建て、松井田通りの入口は今の黒門坂で、黒門を建て、信州裏街道の入口なる禰宜町には、赤門を建て、ゐたさうであるが、今はこれも昔語りとなつて、唯黒門坂の黒門だけ、その名殘を残してゐる。戸數も今は甚だ減じて、僅に三十數戸となりしも、近來登山熱の勃興に伴ひ、四季の觀光及び避暑の士人、次第に其數を増し、殊に秋期紅葉の期節に至つては、觀光客の來往織るが如き、盛況を見るに至つた。されば從來の旅館、養氣館菱屋旅館、東雲館の外に玉屋旅館を増したるも、尙四季共に相當に繁昌してゐる。

神 社

妙義神社 北甘樂郡妙義町白雲山の東麓に鎮座して、社格は今縣社に列せられ

てゐる。

祭神 日本武尊を主神とし、磐長姫命、豐受大神、丹生大神、菅原道真公、大納言長親公

例祭 毎年正月の初卯、二、三卯の日、四月十五日、十六日、十月九日

由緒 社記に依れば里老の傳ふる所と稱して、宣化帝二年の創建に係り、元は波己曾大神と稱へたる由見ゆるも、考證の由るべきものなければ、今遽に信じ難きも、神祇志料によれば、波己曾神は今白雲山に在り。故に白雲山神社と云ひ、又武尊權現とも申す。傳へ云ふ、妙義權現の地主神なりと。上野神名帳考證には神社の傍に、御蒜島とて、蒜のみ生ふる處あり。此物は神の甚く愛て給ふ故に、手に觸るゝ者忽ちに罰を受くと。此説いと鄙びたるが如く聞ゆれど、日本武尊の蒜を白鹿に擲ちて、其禍を免れ給へる故事に出てたるなるべし。然らば實に日本

武尊を祭れるなりといふべし。又名跡志に、諸戸村に今破胡蘇明神あり。是は三代實錄に、貞觀元年三月壬午二十六日授上野國正六位上波己曾神從五位下。元慶三年閏十月四日庚寅授上野國從五位下波己曾神從五位上。同四年五月二十五日戊寅授上野國正五位下波己曾神正五位上勳十二等とあり。上野國神名帳、碓氷郡の中に從二位波己曾明神と見え給へり。

古へは此あたりも碓氷郡にてやありけむ。今は額に正一位破胡蘇大明神と見ゆ。何時の頃文字を書きかへけるかや、かくしばしば神位も進み給へるに、いかで延喜の神名式にはもれ給ひけむ。古語拾遺に至天平年中、勳造神帳、中臣專横、任意取捨、有由者小祀列、无縁者大社猶廢。と云ふをも見侍れば延喜の御時も、さる事なごにて、載せ給はざるにはあらぬか、もしさることならばかしこき事也かし。(名跡志)

大日本地名辭書に、妙義神社、妙義北峯(山)の中腹にあり。祠邊に舊僧祝の家

及び民宅集り一市を成す、故に妙義町とも稱す。富岡町の西四里、北に碓氷郡松井田、五料の村驛を下瞰す。妙義の名義詳ならず。古は専ら白雲山と唱へしを以て、或は波己曾神に擬せらる。又山中武尊神を祭るを以て倭武尊の事を説き、又史傳に花山院長親卿の字明魏と云へるを以て、卿の開創とも爲すものありと。澤氏漫遊文章云、金洞山有寺曰巖高、扣寺僧以山之遊跡祠之起本、僧唯說道士長清事、事在百年前、其前無得而說、其祠之所刱、未之詳、地主神稱波己蘇、亦未詳何神、世人所尊崇者、所謂香火之盛、唯妙義祠、祠在白雲山麓、磴道百餘級、祠貌極壯麗、聞之、白雲山最嶮、其奇不及金洞、故不欲登也、其祠又未詳所奉祀、皆以長清爲開山祖、其墓在金洞山上方、距今百二十年矣、在妙義則曰長清法師、今茲正當一百年、故東叡王奏贈僧正位焉、神仙固不可思議、歿年不同、乃

其職由爾、唯山之奇絶於海内、游者何罕、余而不記、亦將何以傳、然余所登中嶽一山、山之白雲金鷄皆屬、豈一旦所能盡哉。後上野志に云、妙喜大權現は白雲山と云ふ。別當石塔寺、在昔は新田長樂寺の末寺なりしが、近世に至り江戸東叡山元光院の長清法印之を兼帶してより大に繁昌し、神威も滋熾に成りしより、長清を當寺の中興とす。長清の墳は當山の下の坊(金洞山)に在り。名跡志に云、妙喜大權現の別當本坊は白雲山高顯院石塔寺と云ふ。堯惠の北國紀行、佐野船橋の跡をたづねし條に、西の方に一筋平かなる岡あり。上に白雲の山、荒船のみやしる山云々。是妙義の物に見えし初なりと。和訓栞に妙義は上野國なり。妙義權現と稱す。叡山の法性房の靈なりと云へり。亦飯綱なりとも云ふ。法性房は延喜帝の時の人なり云々。後上野志に又妙喜大權現白雲山岳山にあり。世に傳ふ當社は法

性房尊意僧正を祭る云々。翌檜にも妙義山は僧尊意の跡なりと云ふ。山吹日記に云、鳥居の額、白雲山、樓門の額、高顯院、尊意を祀るとも、花山院内大臣光秀公と申しし人、世の亂に都の内も物うしと、此のわたりさすらひ給ひて、あからさまなる、草の庵に住みてうせ給ひしを、此山に社を立て、妙喜の神と祀りしともいへど、光秀公の名、公卿補任に見えず。吉野の方の御人かと思へば新葉集、園大曆、南方記傳にも見えず云々。不問談に、白雲山は妙義法師を祀る。故に妙義山と云ふ。妙義法師は叡山の法性房尊意にて、元亨釋書に委く見えたりと云ふ。

尊意僧正の傳は元亨釋書卷の十感進四の二に見ゆれど妙義と申しし事は見えず。他書に有るにや。尊氏將軍の法名は妙義と申されしなり。閑窓隨筆には、花山院右近衛大將長親、薙髮して妙魏と云ふ。此人を妙喜と誤れるなるべしと云ふ。南山巡狩錄に云。明德五年、故の南方後龜山院に尊號をすいめ、太上天皇と稱し奉る。其年にや、花山院右大將長親卿も出家し給ひ、耕雲と號し給ふ。又かれて字を以て

明魏とも稱せり。長親卿は歌道を以て世に知られ給へり。永享中に敕撰ありし、新續古今集に、長親卿を明魏法師と書きて載せたりしを、沙門契沖評して「いかに南朝に仕へ給ひし人なればとて、右大將まで昇り給ひし人を、かく書ける事は、心なき撰者かな」といへり。

上野名跡考に云、妙義は尊意僧正を祀ると云ふ。元亨釋書に、尊意、姓は丹生氏、平安城の人なり。其先應神天皇の後胤なりと見ゆ。今斯に丹生村あり。和名抄の郷名にも見ゆ。丹生は姓なり。按に此地に上古丹生氏の者住して、其祖先なるを以て、茲に祀りしものなるべしと。(眞に尊意法師を祀りしものならば此説の如くならむか)

以上諸書を合せ考ふるも、中古以上の事は甚だ不明であるが、近古上野東叡山宮家の御隱居所として、皇室の御崇敬厚く、殊に東叡山御親祭の神社にして、別當、高顯院、是心院、石塔寺は御留守居と稱へたことや、維新前は上野東叡山には、妙義神社を祭祀したる社殿と、妙義役所といふものありしことは、今尙古

老の知る所である。此等の事實によりて考へても、上野東叡山との關係の深かりしことは、容易に想像せられる事である。又、

徳川幕府は年々玉串を奉納し、當山からは、一品公辨親王の御親筆に係る、「妙義大權現」と書いた摺りものに、東叡山の印を押して、幅として獻納する例になつてゐて、幕府にては之を諸侯に頒ち與へたものであるさうだ。

尙幕府は神領三十石の御朱印を寄進し、家綱將軍は特旨を以て、山林二十町八反十三歩を寄進せられた。斯く幕府の崇敬も厚かつたので、衆庶の信仰は殊に深かつたのである。

社殿 往古波己曾神と稱へた頃は、式外の官社に屬して、社殿も頗る宏壯美麗なるものであつたらしいが、中古衰微したるを、建武の朝に華山院長親公が社殿

を改築せられ、慶長七年に葉山左衛門、中根七藏に命じて、社殿を改築せしめてより、今日の如き宏壯優美なる建物と成つたさうである。當時從前の社殿は、之を本社の右隅に其儘移し、社號と共に保存し、拜殿は現今の神樂殿に引き直された。石垣も當時改築せられた。又別當職高顯院の建物は、東叡山の宮と御兼帶の宮殿とし、且つ御隱居所とせられてゐた。

御隱居所と云ふは、十二間四方の八棟造りにて、輪煥の美を極めたものであつたが、嘉永年間に祝融の殃禍を被り灰燼に歸して、嘉永五年に再建したのが今の晨光閣である。

社域 甚だ廣濶にして、老杉亭々として聳えたる間より、金碧朱楹の妙匠を隠見してゐる。

社域内の光景 町の西端人家の盡くる處にある石階を(石材は集塊熔岩で石塊が凸出してゐる)上ると
 仁王門あり、准三宮一品公遵親王御親筆の額が掲げられてゐる。仁王門の右側石
 壇の上にあるのが、晨光閣(往年北白川宮殿下が御親筆を以て、晨光閣と云ふ)て又白雲閣とも
 呼び、棟續きの社務所をも總括して、里人は單に御殿と唱へてゐる、仁王門を潜
 り、又石階を上ると、紫銅の華表(高さ三間三尺)を建て、二品良尙親王御親筆の篆額が掲
 げてある。小川に架けた建の岩橋と云ふを渡ると、北に魚形石、南に兒島高德の
 碑と云ふ古碑があつて、「こゝろさし立る願をうちなびく此のしら雲の山にいのら
 ん」と云ふ歌が刻んである。此附近にある巨杉が有名な妙義の五本杉で、寶龜年
 間に植附けたものと傳へてゐる。是から石階を登り詰めると、隨神門あり、前に
 隨神、後に力神(赤鬼と青鬼)を安置してゐる。此處に三個の大釜がある。これ西遊行囊

抄に、妙義の宮は東向、石壇の前に釜八ツ並べ、常に火を燃き、巫女數十人並び
 居て湯の花と云ふ事をなし、參詣の人に御託宣を聞き給へといふ云々とある。湯
 花に用ゐたもので、昔は此の釜を石壇の前に並べ、常に御火を焚き五六十人の巫
 女並び居て、湯花と云ふ神事を行ひ、參詣者が神の御託宣を聞いたのであるさう
 だ。更に唐門を潜ると社殿がある。拜殿、幣殿、御内陣、御饌殿、神樂殿等備は
 り、何れも輪喚の美を極め、幽邃の間に尊く嚴めしき社殿が建て列ねられ、人を
 して崇敬の念に堪へざらしめる。社の裏門を出ると神馬殿あり、石菖蒲を啜せた
 木馬を置き、外に百合若大臣の鐵弓鐵矢と云ふ、鐵の弓箭が納めてある。(百合若
 大臣の
 こと後
 におり)

御殿の一部に寶物陳列室を特設して、希望者には觀覽を許す規定になつてゐる。(寶物は略す)

神山を深みまづげみ仰ぎ見れば白雲動く大杉の上に。
 矛杉の直なるこゝる神山のかみし知れば人はまらすとも。

村上 鯛魚

中之嶽神社 金洞山三嶺中の所謂中之岳の麓に齋さまつり、今は小坂村の村社に屬してゐる。

祭神 前宮に大國主命を祀り、奥宮に日本武尊を奉祀してゐる。

例祭 初千祭 正月朔日、養蠶祭 四月二十五日、大祭 十一月十五日

由緒 古老の傳ふる所によれば、上古日本武尊東夷征伐の砌、此の山の妖賊を退治せられしかば、後村民等その垂跡を慕ひまつりて、小祠を設けたるに創まり、その後嵯峨天皇の御宇弘法大師登山して、大國主命を齋さまつられた。降つて壽永年間に藤原祐胤といふ人、創めて祠堂を建立した。後織田信長の時に、北條氏の臣加藤長清此の山に來りて、修業せしを、本郡小幡の城主織田筑前守深く之に

歸依して、戰國擾亂の際に尙、廢頽その影を失ひたる、堂宇を再興して大に面目を改めた。後松平攝津守の封を此の地に移すや、當山を祈願所として、巨額の資を投じて壯嚴なる殿堂を建築せられたれど、文久三年山災の爲に類焼して全部灰燼となり、當時天を摩して鬱蒼たりし、老杉古松も皆枯れ失せたりと云ふ。その後亦領主の出資によりて再建せられたるも、明治十五年三月荒船山に發りたる山災は、烈風に乗じ飛び火して、亦當山を烏有に歸してしまつた。現今の祠堂は爾後社掌工藤氏が、拮据經營の効によりて成れるものなるが、以前と異り出資の人なき今日のことなれば、今は昔の影もなく、神威の程の疑はる許である。神國の民草たるもの如何の感あるか。

當山に弘法大師が奉齋せられた、大國主命、所謂大黒天の木像は、その後幾

度か改造せられたさうであるが、その御影は最初から少しも變らぬものらしく、右手に利劍を持たせらるゝ奇形のものである。之に就いて著者が息心調和法の師なる、天真池田氏は嘗て雑誌「真人」に掲載せられたるものを次に録出することにした。

元來大黒天といふものは、摩訶迦羅神と云へる佛なるが、其の字音の近きと、袋を負ひ給ひしこと、鼠のことなど、よく似たるより、大國主命を之に附會したるものなり。而して台家の説に、傳教大師逢大黒天於東坂本、短身黒面、手持槌、足踏米囊、專掌壽福、とありて、左手に袋の口を執り、右手に小槌を握れるは、誰人も知る所なり。然るを弘法大師が故らに劍を持たしめたるは、大國主命が未だ國造大己貴命、又八千矛命など申奉りて、豊葦原の

まつろはぬ者どもを、伐ちきため給ひつる、其の頃の御姿を撮り給ひけん。此他寶珠を持てる御像の有るを聞けども、是は最も後に於ける御姿ならんと想像せらる。

傳説に曰く、小槌は此の中より、金銀財貨の無限に出づる寶器なり。然れども唯持てるのみにては何の効もなく、力の續く限り、氣根の及ぶ限り、打振り打振り暈勉努力せざるべからず、此の故に打出の槌と名づく。頭に頭巾を冠るは上を見るなどの意にて節儉を意味す。即ち此の二つにて富を致すの大道か。勤儉なることを示せし者なりと、併しながら勤儉の二つにて必ず富貴を得らるるものとはいふべからず。一面には利害を考へ得失を察し、小情の揺かす所とならず、よく一時の慾望を絶つて、大義大道に就くの決斷なかるべからず。優柔

不斷身を誤る者は、世間頗る多し。是に於てか大黒天亦剛毅の勇を現はし、降魔の利劍を振り、一刀兩斷の大決定をなす時なかるべからず。大國主命の當初亂賊剿伐の大業に當り給ひしに對照して、大に吾人の誠めとなるべき所あり。余此のニコニコせる福の神も、亦晃々たる利劍を有することに、深く感ずる所あり。云々。

後上野志に、中の嶽巖高寺開山長清法印金洞山云々。山吹日記に、本尊中興開山長生法印牛に乗りし木像あり。武尊權現、波己會の神、四丈許の巖の上に菅神ませり。大日岩、阿彌陀岩などありと云ふ。本社奥宮の傍に長清道士の碑と墳墓(傍に常に道士が乗りたる牛の墓あり)とがある。又八丈が窟は道士が穴居の跡と傳へ、當社の寶庫には道士の遺物を藏してゐる。次に天真池田氏が當山に山籠修養の折調査せられた

る、道士の傳記を請ひ得て參考に資することにした。

白雲山妙義神社、下の坊と稱する處にある。「東叡山元光院當山兼住中興僧正長清」と記せる、古碑の主なる長清道士は、後柏原天皇大永五年に生れ、靈元天皇延寶元年迄生存せり。其の壽百四十八、生れしは秀吉に先つこと十一年、死せしは四代將軍家綱の治世二十三年にあたる。時に治亂興廢最も頻繁にして、史上の事實に富むといへ、其の永き經歷には、驚かざるを得ざるなり。

碑文には、道士長清は其姓を知らずと記せるが、加藤といへる者の如し。北條氏の臣にして小田原に在りしが、弱冠の時父は奸賊の刃にかゝり、横死を遂げしより、遺恨やる方なく復讐の念切なれども、賊は剽悍の曲者にて、織手の如何ともなし得る所にあらず、心ならずも仇敵の存命を神に祈り、なれにし里

を出て、上野の國に來りて、妙義の奥に籠居して人知れず木石を對手とし、擊劔の術を練ること夙夜怠らず、茲に幾多の年を累ねぬ。

中之岳の半腹に、八丈ヶ窟といへる石室あり。崖の中途にあるを以て出入には稍困難なれども、野獸の害を受くる虞なく、其の面積は廣からざれども、自然の窓さへ備はりて其形頗る妙なるが、是れぞ長清が雨露を凌ぎし巢窟なりとぞ。固より食は餓を凌ぐに過ぎず。衣は僅に肌を被ふに足らざるべきも、志を懐ける肉體には元氣常に充實して、寒に傷れず、暑に損はれず、膂力日に増し容貌魁偉、武術亦大に進みて、天晴なる勇者となりぬ。是に於て劔を挾んで山を下り、讐の在所を尋ねしが、幾許ならずして之に邂逅し、白刃を振ふこと三度、遂に父の墓前に腥き一塊を供へつゝ、在りし昔の血に泣いて、孝子の誠を

盡ししより、遠近傳へて其の義を賞し、主家亦父の祿を給して其の家を繼がしめんとせしも、長清は之を肯んぜず、劔を投じて歎じて曰く、不俱戴天之仇なればこそ、かくは人をも殺しつれ、決して盛徳の事にあらず。戰國亂離の世に處して、人々相食み以て功を争ふ。淺ましき限りにあらずや。年來の志も已に果しぬる上は、今將た何をか望むべき。浮世離れし金洞の、山の奥こそなづかしけれと、再び妙義へ立歸り是より永く穴居の人となり、専心道を修め生を養ふことに努めしとぞ。

長清の再び山に入るや、恒に鐵の杖をつき、鐵の下駄を穿き、嶮しき巖石の上を行くに、其の疾きこと風の如く、見る人驚嘆せざるなし。一牛を養ひ需めんと欲する物ある時は、書を筒に入れ角に結ぶ、牛能く其の意を解して山を下り、

二里餘を隔てし松井田驛に詣る。見る人道士の牛來れりとして歡迎措かず、筒中の書によりて其物品を調へ脊に負はしむ。朝出て、夕刻歸るが常なりしとぞ。

(長清の塚の側に此牛の墓がある)

長清の修むる所は、所謂忘我的真人なるが如し。然れども邑人之を尊敬すること神の如く、之に事ふること君の如くなりし由なれば、想ふに其の教ふる所示す所、人を化育する徳ありしや疑ひを容れず。領主織田筑前守其の徳を慕うて、一時廢頽せる中の岳巖高寺(今の中の岳神社)の堂宇は再建せられ、妙義の社も亦其の面目を改めぬ。東叡山との關係は詳ならざれども、妙義山に法親王の御座所を設けられ、寛永寺の直轄となりしより、其中興の徳を表して、元光院の住持とし、僧正の位を追贈せるものならんか。其の初は人を避け世を遁れ、花鳥

風月を友として、たゞ己をのみ潔うせんと欲せし者なりとはいへ、其の遺蹟の大いに見るべきものあるは、期せずして活動的真人の域に達せし者といふべからずや。齡百五十に垂んとして死する迄、いさゝかの病苦疾患もなく、容貌は五六十歳の者の如くなりしとは、今尙口碑に傳へらるゝ所なり。(雜誌眞人所載)

長清道士の事蹟は、右天真氏の文によりて明かなれども、次にその碑銘を記して参考に資することにしたが、道士の碑銘は、古字多くして讀み難ければ次に之を通字に替へて見た。

道士長清者、不知其姓、隱金洞山有年矣、其先相州人、仕小田原、會關中擾亂、其父素悍勇、後爲賊兵所殺、賊亦暴酷驕恣、不得復其讎、遂去毛入金洞山、勉強學兵法擊劒之術、血氣飄溢容貌甚偉、乃苦身焦思、人無識者、居頃之其業既成、由是益厲志、生平挾劒、適有天幸、微知讎所、既至拔劒三躍而擊之乃死、衆之聞

舉多道士之義、道士退而投劔喟然歎曰、俠者以武犯禁、豈盛德之事乎、我能爲我所欲、亦將何求之有、乃辟平依險、間寂（窟）獨居、再隱金洞、義不爲臣於相、於是脩道養氣、居恒執鐵杖履鐵屐、蹠步跳蹈足之所至、隨風東西、乘虛如履實、蓋非舟車足力之所及也、人觀而異之、好乘一牛、委食於巖穴之下、每有事、掛筒於其角、命至松枝驛、取其所求、驛去山十里許、市人見而識之、乃云道士牛來、因視筒中所狀之書、以其物載之牛背上、且發夕還率以爲常、可謂道士能解牛意、牛亦得道士心、繇是足不蹈市井、以是爲戲樂耳、金洞一稱中嶽、左白雲、右金雞、確河經其北、固靈僊之所窟宅也、道士以行與世接、進退盈縮與時變化、邑人延頸舉踵、敬之若神、事之若君、雖熊罷狼豹乎、無不柔馴者也、時有暴風雨鬼夜哭、山鳴谷應、辟然如雷、道士正色叱之輒止、而不見其跡也、人怪問之云我能鞭管百鬼、

獨日恚怒責鬼魅之犯法者耳、天地不能戾、造化不能欺、道士有焉、晚尤學長生術、刻情脩容祖述群僊、與秣塊無以異矣、或云好餌黃精、邑人謂其已近二百歲而視之則如五六十者、慕者益仰、其德益高、享年百四十有八、延寶癸丑以壽終、其居止及鐵杖鐵履依然猶存、嗚呼世所謂尸解者非邪、高子曰桓子新論云、天下神人五、一曰神仙、二曰隱倫、三曰使鬼、道士之行若斯之難、道士焉不學而亦何僊之有、歟、噫道士雖能隱百載之後、得寺僧慈海而名益顯、豈德之所到乎、慈海與余善、故余爲之傳立石其墓側云。安永戊夏上毛高克明撰并書

御嶽神社 金鷄山の南麓にあり。妙義町大字菅原に屬してゐる。近年拜殿社務所等を里に移したれば、唯社殿のみ存してゐる。

啄木鳥のたゝかすなりて山淋し

蝸 魚

(屋菱)館氣養 館旅 町義妙



旅館及休憩所

養氣館 菱屋傳平 黒門坂を登り、松井田街道が富岡街道の登口に接する處の、突き當りにある三層樓で、文化元年から今日に至るまで、百餘年間斯業を繼續して、最も評判よく、極めて信用ある旅館である。亦諸般の設備よく整ひ、萬事懇切を旨として客遇に勉め、殊に團體の宿泊には一段の注意と、便利とを圖るので、四季共に繁昌してゐる。

その位置形勝の地を占め、放眸遮るものなく、遠く平野を望み、眞に山色水光の觀に富み、特に階上の觀月の如き特筆すべき所である。

往年 華頂宮、北白川宮、梨本宮各殿下の御休泊の榮を辱ふし、又去る三十一年七月、内親王貞宮殿下當地御駐駕の折、邸内に浴室を新築し、菅原村に湧出する鹿の湯を汲み、浴湯を殿下に供奉して、無上の光榮を得られた。古來文人墨客の來泊せられたるもの甚だ多く、中にも南宗畫の巨擘田能村直入氏は九十三歳の老齡を以て登山せられ、當館に宿泊して主人の爲に畫及び讃を揮毫せられた。

妙義山頭一古杉

千秋相對錦鷄岩

小茅店主如僊老

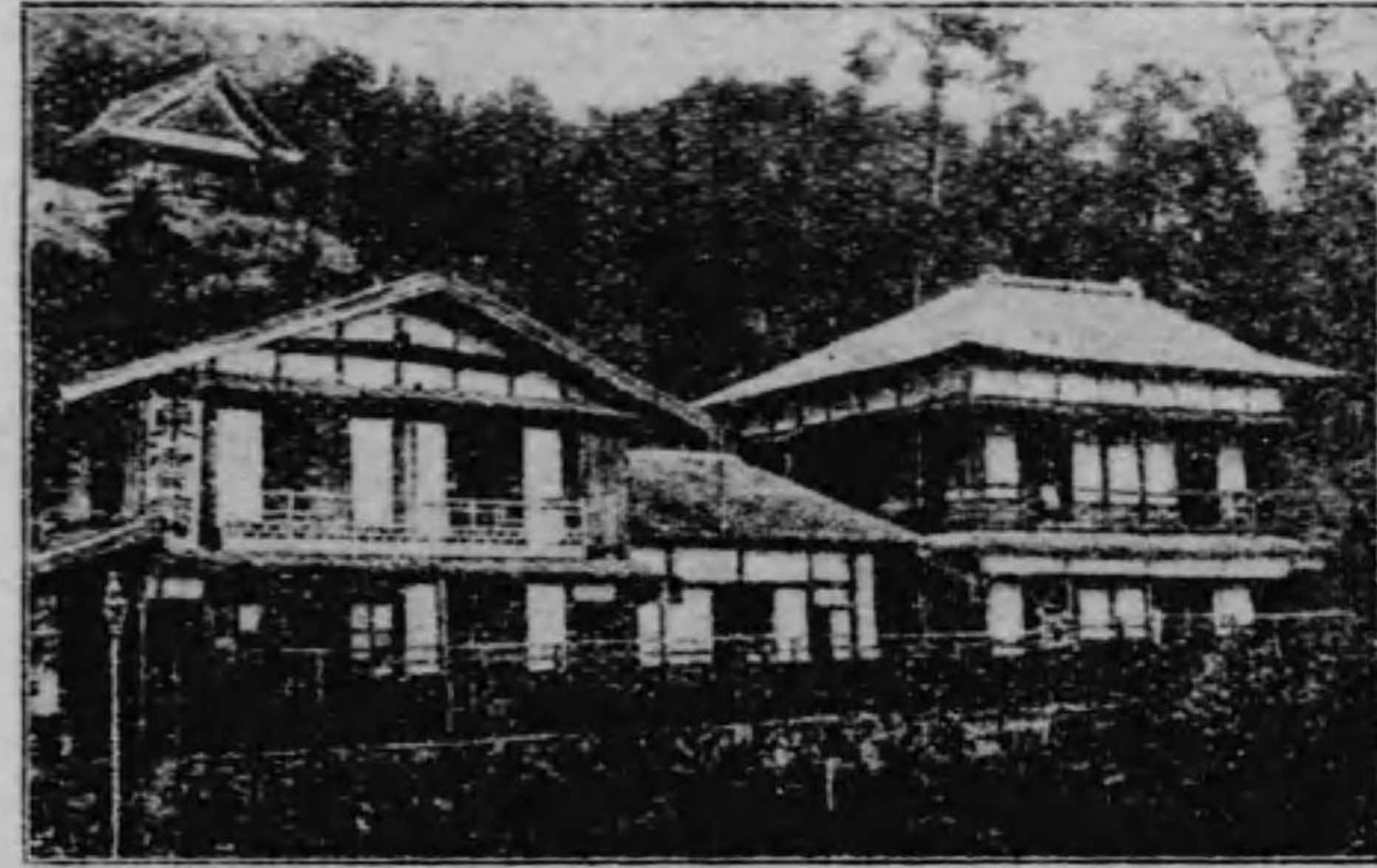
菓味茶香亦脫凡

明治丙午六月題於妙義山麓

菱屋爲主人岡部雅契囑

九十三歳 直入道人

館雲東 館旅 町義妙



東雲館 齋藤鐵次郎 妙義神社の石段の下、中の嶽道の岐る右側にあり、位置高燥にして、眺望殊によろしく、遠く平野を隔て、秩父、筑波の諸山より、近くは御荷鉾、赤城の諸嶺を望み、脚下又碓氷川の蜿蜒として横はるありて、風光眞に畫くが如く言語に絶するものがある。室内清潔にして、主人亦客遇懇切に、宿泊休憩ともに、安直を旨とするが故に、勉強質實の評判高く、業務日に榮え、四季共に來客の絶ゆることなく、殊に即席料理の調進、頗る輕妙なりとの評高ければ、觀光の

往復少憩して、試みらるゝも興あることである。當旅館も團體の宿泊を歓迎し、萬事便利を謀りつゝある。

樂水軒 玉屋旅館、黒門坂より約一町、新坂と合する處の右側にあり。近年の創業に係るも、地の利を占むるのと、頗る勉強さるゝので、常によく繁昌してゐる。

榮屋 高橋吉太郎 菱屋旅館と東雲館との中程で、北側にある御手輕の休憩所である。和洋酒類を初め果物類、菓子類、名物御土産袋物の調製から、登山用のステッキまで並べてある。殊に名物のそばとうどんは、評判よろしければ、觀光の往復に立寄つて、簡單に腹こしらえせらるゝも亦旅の一興である。

選種園 (葡萄園) 元のお仲茶屋のあつた處で、猩々岩の南麓である。先代小澤

善平氏は、明治元年に渡米して、専ら葡萄其の他の果樹の栽培法と、葡萄酒の醸造法とを研究し、同七年に歸朝して、東京谷中に選種園を開始し、汎く果樹類と一般種苗を栽植し販賣せられた。偶明治十七八年の頃、観光の爲め此の山に登り、此の地の地勢氣候等の果樹の栽培と、葡萄酒の醸造に適することを觀破し、同二十年中に拂下手續を了り、同二十一年より開墾及植苗を開始し、同二十四年に十六町歩の開墾を終結して、茲に第五支場を設けられた。其の後二十七八年頃より、葡萄酒と梅酒の醸造を創め、此の山の名物を新造せられた。其の漸く世人の知る所となりたるも、三十七年に病歿せられたので事業は稍頓挫した。當時當主なる子息開氏は、未だ十三歳の少年にして、亡父の遺業を受け、苦心焦慮の結果、今や果樹類は殆ど新種と改植し、尙葡萄酒と梅酒の外に、葡萄と梅とを利用して、

羊羹を工夫して、此の山の名物を増加したるも、今回酒造法改正の結果として、當春より梅酒の醸造を一時中止することの、止むなくせられたるは、甚だ遺憾なることなるが、小澤氏は尙果實利用の土産品を工夫せられつゝありと云へば、葡萄酒、葡萄羊羹、梅羊羹の外に不日斬新なる土産物を作り出さるゝてあらう。

金洞舎 主人柴垣氏は、此の大公園金洞山大部分の所有者である。去る明治四十二年中、硯水窟の下に居宅を新築し、山中所々にベンチを設けなどして、観光者の便利を謀られた、翌四十三年中、今の一木杉の側に地を相して、居宅を新築し、亭を設けて見晴亭と名けられた。地は金鶏山に對し、筆頭石を眞向に望み、西南と東方とは開けて、信州の峯巒と、上武一帯の平野とを望み、眺望絶佳にして、殊に亭により金鶏の新緑や紅葉を瞰望するは一入の眺である。

不如歸杉高々山古し
闇中に山百合の花動くかな
蛎魚

案内

妙義三山の山案内は、妙義山案内組合といふものがあつて、左記の規定に依つてゐるから、希望の向は旅館なり、休憩所なりへ、依頼なさればよいのである。

妙義山案内料規定

- 妙義町より 大の字まで 金貳拾五錢
- 一、白雲山 大の字より 奥の院まで 金拾錢
- 奥の院より 頂上まで 金拾五錢
- 一、金洞山 妙義町より四石門を経て朝日岳まで 金四拾五錢
- (中の岳) 朝日岳より 頂上まで 金拾五錢

- 一、金鷄山(妙義町より 頂上まで 金五拾錢

- 一、人數の多少に不拘一定の料金の外不申受候事。
- 一、一日の案内時間を五時間と定む、其より以上に亘る場合は一時間に付き、金八錢を申受け候事。
- 一、荷物は五百目以上一貫目迄金五錢、一貫目以上二貫目迄は金拾錢を申受け候事。
- 一、山駕籠は妙義町より中の岳社務所まで、金壹圓五拾錢申受け候事。

右之通り組合に於て規定仕り確く相守り可申候間、若し規定以外に賃錢申受くる如きもの有之候節は、事務所又は宿主へ、御申出有之度候也

妙義山案内組合一同

登山案内

妙義山の登山口は、松井田、磯部口。富岡、吉井口。本宿口即ち舊女街道の外に、下仁田方面より登

るもの、横川方面より登るものなどあれど、特に記述する程の事もなければ、最も観光者の多き信越線利用者のために、一言注意することにした。

高崎線、兩毛線等利用せらる人は、高崎驛に於て、信越線に乗り換へて、磯部又は松井田に下車し、一泊せらるるか、妙義へ直行することは随意なるも、信越方面より來り下車する人は松井田に、高崎方面よりの人は磯部に下車するが順である、磯部停車場より妙義町迄二里稍強なるも、最後の黒門坂の外坂らしき所はない、松井田停車場よりは順路約一里半弱なるも、少し坂がある。尤も徑路があるが、(之は往々橋のな)磯部にて特に入浴する人は格別、急ぎの人は磯部より登り、松井田に下るが賢き方法である。磯部、松井田共に妙義町迄、人力車の便あれば、少し位の荷物あるも差支はない。(人力車の賃金は磯部からも、松井田からも同値であつた。)

毎年十月十日頃より、十一月十日頃迄、上野、横川間の汽車賃金の割引ありて磯部、横川間の各驛に於ては、期限内は幾回乗降するも差支なき例なれば、殊に此の期間は好都合である。

妙義町より白雲山の頂上まで五十町、中の岳社務所へ一里十町、金鷄山へ二里ある。登路の案内は、已に記したるが如くなるも、初めての人は前記の規定賃金だけにて、説明は勿論危険な處は注意して呉れるから、必ず案内者を雇ふ方が得策である。

特に學生諸君の爲に一言すれば、碓氷川の兩岸地層の立派な成層に注意下さい、之は凝灰岩と凝灰質砂岩で、妙義の下まで續いてゐる。又此の登路附近の畑には、軽石質の礫がある。之は天明三年に淺間山より噴出したるもので、今でも畑を掘れば、二三尺の層をなしてゐる。此の礫のため墾分農民は苦められたのである。

妙義町より各地への里程

一、白雲山大の字まで	十五町	一、菅原天満宮へ	一里	一、前橋市へ	八里
一、同奥の院へ	二十五町	一、下仁田町へ	三里	一、榛名神社へ	七里
一、同頂上へ	五十町	一、一ノ宮町へ	三里	一、伊香保へ	九里
一、撰種園へ	十五町	一、富岡町へ	三里半	一、赤城山大洞へ	十六里
一、一本杉金洞舎へ	一里	一、吉井町へ	六里	一、黒瀧山へ	六里餘
一、中之岳社務所へ	一里十町	一、高崎市へ	六里	一、輕井澤へ	七里
一、金鷄山頂へ	二里半	一、藤岡町へ	九里	一、淺間山へ	十一里餘
一、松井田驛へ	一里八町	一、鬼石町へ	十一里	一、横川へ	二里餘
一、磯部鐘泉へ	二里十町	一、三峯山へ	二十二里		

三山巡り

妙義山より松井田に下り、三の倉に出て榛名山まで七里、伊香保へ九里、妙義、

榛名間の道路は左のみ悪しからず、風景の賞すべき所も多ければ、此の風景を探りつゝ、榛名登山も面白い。榛名山には、榛名神社を祀り、附近に瓊鉾巖、鞍掛巖、九折巖、袖摺巖、鎧巖等の奇巖に富み、山頂には榛名湖(伊香保沼)を湛へ、湖畔に榛名富士(伊香保富士)がある。又湖を圍む烏帽子、鬚櫛、掃部、硯等の奇山と、擡確巖相馬山、二ツ岳等がある、此の風光明媚なる湖畔に旅館もある。伊香保は言ふまでもなく、日本有数の温泉場で設備はよく整うてゐる。伊香保から澁川まで電車が

ある。(澁川で錦光堂の満頭か、佐鳥屋で名物の鮎料理に腹こしらへして、赤城登山も妙である。伊香保、澁川間里程二里。)

澁川より赤城山頂の大洞へ、僅に五里、山頂には赤城神社を祀り、大沼(赤城湖)小沼の兩湖を湛へ、神庫、黒檜、荒、鈴、鍋割(以上赤城五峯)駒、長七郎等の諸山が聳え、湖畔は此の夏、天幕講習のあつた處で、海拔約一千四百米の處に旅館も二軒ある。

大洞より足尾線水沼驛(旅館赤城)まで三里、梨木鑛泉へ三里半、梨木鑛泉より足尾線アシヲセン上神梅驛へ一里六町ある。東京方面の人は足尾線相老驛アヒヲヒで、東武線トウブに乗り替へ或は、桐生驛キリフより兩毛線リョウマウに乗りかへて歸京する便利もある。(大洞より大間々町へ四里半)以上は上毛三名山一巡の大略である。尙赤城山については拙著赤城山(定價五拾五錢)を参照して下さい。

鳴神のなりはれて山新なり

蝸 魚

詞 林

遊金洞山歌

良

齋

眞宰鍾淑靈、玆山爲誰設、置之遐僻間、煙雲闕秀傑、王侯不得通華輶、側身西

望徒搔頭、乃知造化經綸非無意、蘿葛勞攀援、所聞眞不謾、靈蹤太奇軒、仙豪昔乘白牛至、驅役鬼神闢乾坤、幽絕非人境、古洞白日昏、上有劒鋸排空之疊嶂、下有鵬翼垂天之石門、細路崎嶇緣一髮、礪礪與身相磨軋、縹緲忽出最上頭、群峯突兀露純骨、入紫府、凌蓬山、天風吹袂、嵐翠撲、神魂頓飛動、浩然隘塵寰、下瞰大壑千尋、辟窳無涯際、青林萬樹森蔚、茱萸如麻穎、夕陽時來照、金碧爛相輝、雲靄忽開闔、光怪弄化機、何料人間有此靈異境、宜哉仙豪避世托迹掩巖扉、冥搜乃入穹谷裡、絕巘危峯互飛起、壁立無階不可升、樛木倒懸纏壽藟、石橋蜿蜒架虹霓、天台之梁何足擬、云是山靈所栖居、烈風暴雨定何如、崖崩石落猛獸震、時有天鼓鞺々振林墟、奧區多神異、恍惚誠叵測、誰爲獨往人、絕幽窮勝迹、吁嗟手人間富貴功名如雲煙、蠻觸相爭殊可憐、鳳不鳴兮虞夏遠、不如來此結茅椽。

金洞山

齋藤竹堂

凡山に貴ぶ所の者は、肉に在らずして骨に在り。肉豊なれば則山大なりと雖も、凡山たるを免れず。唯骨多く、故に石壁峭拔、奇態横生、是れ金洞の勝、天下に冠たる所以なり。余砥澤より下仁田を經、東北溪に循ふ。榛棘莽々として人を没し、天將に暮れんとす。金洞を望むに、唯秀崖千仞、雲表に縹緲たる而已。

夜岩高寺に投じて宿す。寺は山腹に在り、推嵐疊綠、人の衣枕を壓し、夢魂も亦冷やかなり。次日寺後より級を躋り、武尊の祠に謁す。洞有り金洞窟と曰ふ。

洞外は絶壁空に倏す。長清道士の碑を置く。道士は開山の祖たり。事載せて碑中に在り。愈々登る、石背欹側し、半圯橋の如し。之を渡れば巨石倚疊、折裂合せず、縫衣の綻びたる若く、腹石に貼して而して其背に出づ。鬚眉皆摩す。之を

摩鬚岩と曰ふ。大日峯其上に在り。眺覽頗豁、金剛峯と曰ひ、彌陀嶽と曰ふ。

轟々臚列して、排戟聯甲の如し。天狗岡と曰ひ、鬼面岩と曰ふ。奇醜争ひ出て、高僧誦呪し、百鬼蹲伏する如し。天燭峯と曰ふ。卓立すること綠燭の如し。天柱岩と曰ふ。空を刺すこと柱梁に類す。余峯頂に坐す。四山の勝咸萃^{ミナアツマ}る。猶將軍車上に坐し、而して三軍の兵士環向して、命を聽くが如き也。兩峯の觀既に畢る。乃ち東峯に登る、石門巍立、數十丈なるを見る。是を第一石門と爲す。門内より過ぐ、亂崖攢簇、小祠あり、既にして第二門を得たり。形偏倚、半彎の明月の如し、第三門は甚高からず、而して廣さ數人を容る。第四門は洞然豁大、數間の屋の如し。門外は絶壁に臨み俯して視るに底無し。奇峴之を遠り、或は欹、或は直、或は俯、或は仰、危梯の如く、飛橋の如く、挺芝駢筍の如く、詭態異狀、應接之

が爲に暇あらず。

自ら飛翔の鳥、奔逸の猿となり、絶巘窮谷、一時遍く到らざるを恨む耳。風方に至り、搖々落ちむと欲す。乃ち下る里許、妙義祠を得たり。噫、金洞の山爲る、甚大なるには非ず、而して秀峭絶特、寸崖卷石と雖も皆平凡に超絶す。譬へば猶高士名流の皮膚毛孔、一點塵俗の氣無さがごとき也。天下の山其れ誰か此に醜づる無き焉。然りと雖も、吾能く天下に冠たるの山を搜り、而して未だ天下に冠たるの人物と爲ること能はず。豈亦尤も醜づる無きを得ん耶。

登白雲山

梶井宮盛胤親王

陰雲新捲數峯出。 過客登臨興更奇。
危石巖岩眼前滿。 清遊何處可無詩。

延寶七己未年登白雲山

黄槩潮音

一山高聳白雲裡。 妙義廟宮在此間。
神徳日新靈感顯。 珍財喜捨更無慳。

登白雲山

大宰純

白雲山下白雲飛。 幾戸人家倚翠微。
行盡白雲雲裡路。 滿身還帶白雲歸。

自榛名山抵白雲山途上

杏靄散史

指柱教吾始解疑。 崎嶇稍盡又逢岐。
烏川纔去登風截。 一翻如飛妙義欵。

無題

如電

金洞山皆洞。白雲峯若雲。
誰乎椽大筆。俯仰奈斯文。

丁亥十月宿金洞山夜有殷々之聲

如擊鼓者云天狗奏樂也

依田學海

萬籟無聲秋夜寂。光風過處怪雲開。

老杉樹上殘憺吐。忽有山神奏樂來。

○

佐々木高行

踏み分けて入らんよしなき身なれども山のゆかしき峯のまらくも

○

黒田清綱

久かたの空のみどりも染ばかりもみぢしにけり白雲の山

兒島高德がものせる古碑といへるを

近藤芳樹

いつここに兒島三郎石にさへ花を咲かせし君が勳

○

富田鐵齋

ゑら雲のあやしき山の石門はひとふた三四つ峯に聳ゆる

白雲山

東久世通禱

ゑら雲はわけている山の名のみして紅葉にてらす杉のまたみち

○

秋 竹(佐竹侯)

霧霜にあらそひかねてもみぢ葉のにしきをそむる山山のあかさところを妙義
なる身はゑら雲のやまめぐり、あかぬ眺めも假りの世と思はれぬまで樂しか
りける

立去事一里眉毛に秋の峯寒し

燕村

五月雨や夜もかくれぬ山の穴

一茶

妙義往來

此度妙義御參詣思召候に付、御案内ながら御供可申由、日限定候はゞ、横雲に本郷通を打立、岩槻道と木曾路への、追分越て明る夜を、告る空音や鶏聲か窪、巢鴨通れば庚申塚、護國寺の森左に見なし、暇續に板橋や、蓮沼、志村、打過て、戸田の廣野の花薄、彌生の頃は櫻草、秋は蟋蟀の名所なり。

戸田の川船打渡、堤を越て蔵宿、白幡通て浦和なる、月讀の宮伏拜み、此宿端

の茶店に、暫休らひ遠く望めば、淺間ヶ嶽に立煙り、空にたなびき近く見る、賤の手業もいな珍ら敷、古里も遙に思ふ計なり。

名に大宮の原うちすぎて、末はいづくと白波の、住家もあらで物すごし。當所氷川大明神は、武藏國一の宮石の鳥居より御社迄十八町、古木梢を交へ、神さびまさる神垣や、手向の幣帛も取敢ず、折て尾花を上尾宿、早日の蔭も斜にして、黄昏に及ばゞ、驛路の駒の鈴の音も、繁く行こふ旅人も、足早めるにそ、兼て桶川を泊りと定め、明る拂曉に立出、鴻巣の宿に入ば、淨土壇林勝願寺、越路に箕田の觀音堂、亦箕田村の八幡と申は、融大臣五代の孫源繼綱當所にて誕生し、渡邊源吾と申其舊跡を止めたり。吹上越て熊谷封疆、右に城壘、草々として朝日に輝き、左に見かへれば荒川の流、綿々として潔し。此川は其水上秩父山より出る。

末は戸田川兩國の下にして海に入、堤は又長蛇の如く、路程遙に梅若の土手に續けり。

扱て蓮生山熊谷寺の廟に詣、次郎直實の遺跡を訪へば、只松風の音淋し。深谷を越て岡部村六彌太忠澄の墳墓有。本庄越て神奈川、上野武藏の境成、新町宿に泊を求め、出立空は倉賀野や、明なば渡る烏川、高崎越て尋みん、佐野の渡の船橋は、名のみ残して板鼻や、安中松井田の間成、琵琶窪是妙義への近道也。

此所より見渡風景、巖石峨々と岨立、青苔縁にして尖、古松老杉空を閉、嶺の白雲心なうして岫を出る。

抑上野國甘樂郡、妙義大権現の道場は、白雲衣山石塔寺、又高顯院と稱、人皇四十九代光仁帝、寶龜年中草創以來、數百の星霜を歴るとなる、當山の麓に宿を

求め、奥院へも登、亦中嶽は祀る所武尊權現、此峯頗嶮岨也。土俗云百合稚射貫岩、踏石は、横川に有。

其鐵の弓は、妙義の社前に有。扱當國一の宮、上野十二社悉參拜致し可申候。不具。

上州妙義詣 寛政六年原板
天保年間改正

八犬傳中妙義の一節 (第五卷)

上野國甘樂郡、白雲山、明魏の神社に參詣す。若夫明魏山は白井城の北隅に在り。其西北のかたは、碓氷郡を背にして、同郡の荒芽山(荒船山か)と南北に相對へり。僧正尊意の所開、南朝名臣の隠るゝ所、歴々として古蹟存焉。千歳成阪碓氷は二十有八層より、百六十層なるもの、四阪五阪升降す。

深谷の地を帯れる岸崖を見かへれば、鑿もて穿なせるが如く、高嶺の天に横たふ。崗巒の勢を、うち仰げば刀して削れるに似たり。煙霞の子細なる、泉石の介明なる、實に天上の靈奇にして、人間の絶妙也。

その神殿攝社を咨へば、地主神を波古曾と號け、本社を妙義權現と唱ふ、隨身仁王總門あり。神明宮、日本武尊、天満宮、稻荷神社、辨才天、飯綱、不動、觀音、聖天、大黒天、金毘羅、人麿の禿倉あり。本地神樂護摩の三堂繪馬掛の四阿あり。香水及菅公の硯水あり。枚擧るに違あらず。神殿、佛堂久て、戰國澆季の世といへども、亂妨の兇徒あることなし。

又その名蹤奇峯を問へば、仙人瀧、大黒岩、地藏岳、塞河原、阿彌陀岳、大日岳、彎反岩、金剛峯、釋迦岳、天狗岳、天燭峯、高籠巖、五臺峯、金玉峯あり。

俗にこの邊を奥院といふ。嶮峻たる靈嶽を、仰渺として向上れば、萬尋の青壁は凸凹としてなほ遙なり。

空洞たる幽谷を、兢々として直下せば、千仞の綠苔は究宥として暝眩く、葛藤の掛る所、人迹罕に及び、荆棘の絨る所、鳥路纒に通ふ。その奇、その妙、面あたり目に見、耳に聞く物から、夢に似て夢にもあらず、現にして現ならじと、われなほわれを疑へり。

巨細に是を賦せんとして、左思が十年の苦を積むとも、いかてか拙毫に及ん、目今ここに説出せるは、是明月の前にして、片玉を採る類なるべし云々。

山麓地方名勝及遊覽地

菅原天満宮 妙義方面より下仁田道を辿れば、菅原村の中程過ぎて、右側の小

山の上に鎮座す。木曾名所圖會に、妙義權現は延喜帝の御宇延暦寺第十三の座主法性房尊意僧正、御弟子菅丞相ゆくりなく、左遷し給ひしを、うき事に思ひ、台岳を退き妙義山に閑居し、數年を歴て遷化し給ひしを、妙義權現と祀りしと云。土人もまか言傳へて、此天満宮は尊意僧正の祀りしとも、又菅原は菅神生れ給ひし地なりとも云。

尊意僧正の傳は元亨釋書扶桑略記等に見えて、扶桑略記に天慶三年二月二十四日、天台座主大僧都尊意卒七十七、二十六日公家贈僧正職勅使少納言朝臣と見ゆ。元亨釋書には二十四日無疾而逝す、七十五と見ゆ。されば台岳にて遷化の事なるし。されど妙義山に祀るも故あることなるべし。菅丞相は古今目錄に參議從三位是善卿三男、母は伴氏、承和十年癸亥生と云。國史略にも三子と云。扶桑略記にては、十一年甲子の生にあたる也。俗説辨には四男にて、菅家文章に、承和十二年乙丑年生と見ゆと云。和論語にも四男と云。世に天降給ふ、父もなく母もなし、是善卿を父とせん云し故、養子となすと云は非也と、俗説辨に云ひ、王代一覽にも、世に言傳はあやしきことなりと云へり。實は院の御胤ゆゑ天降ると云と、或書

に見ゆるも證なき事なり。大日本史にも、菅原道實字三小名阿呼、參議是善第三子也、延喜三年二月二十五日薨、年五十九とあれば、承和十二年の生れなるべし。此里に生れ給ひしと云は、續日本紀に、天應元年五月因二居地名一改二土師一以爲三菅原姓一とあるを見てなるべけれど、斯にはあらず。日本紀に、垂仁天皇葬於菅原伏見陵と見え、後に菅原や伏見と歌にも咏めりし地にて、大和國添下郡の菅原の里なり。茲も同菅原なれば、名によりて祀りしなるべし。(以上名跡志)

四拙案するに、隣郡多野郡の内、舊綠野郡の内に、土師郷(今の美九里村)あり、當國神名帳に、正五位上土師明神と見ゆ、今尙美九里村本郷土師明神ありて、附近に埴輪焼きたる跡、土俵の跡など存し、土師氏の祖廟なりと傳へてゐる。菅家又舊姓土師氏なれば、茲の菅原とも何等かの關係ありしやも知れず、など考へたことがある。次に當社祠官中澤氏が嘗て矢掛弓雄氏に托して、調査せられたるもの眞に近く、且つ興味あるものなれば、其の概要を摘記して紹介することにした。

公は宇多天皇の知遇の恩に報じ奉らんとの心より、佞奸の身に禍するを知らながら、隠晦して安を偷むの心なく、遂に雜輩の乗する處となり、延喜元年正月二十五日、右府の官より貶せられて、太宰府に遷され給へば、當時已に職に就かれたる四人の公達も、すべて配竄の人となり、其の外男女合せて十人(一説には

十四)の御子達には、御咎めなかりしかども都の住居なり難く、昨日に變る淵が瀬や、島田、田口等の外は、おのがまにまに散り去りて、前途を見参らすものもなし、爰に上野國天沼の庄、菅根乙彦なるものあり、若年の時より菅家の仕丁となり、其の時年は老ひたれども、常に馴染給へる、滋丸と申す幼君を伴ひて、遙々郷里に立歸り、まめまめしく册き仕へしこそ殊勝なれ。かくて公の薨去の後、延長元年官位を復され、尙正徳四年左大臣正一位に、追叙せらるゝと同時に、御子達の遠祖も、皆赦免となりしかば、滋丸君も久方振りにて都に歸らせ給ひ、後元服して滋桶と申せしと、よりて紀念として手づから七歳の時の姿を彫刻し、菅根が許に送りしかば、之と共に菅公の神靈を合せ齋き祀りしとぞ。古記にも菅公の一子上野の國に來りし由見ゆと云ふ。(以上天真氏)斯く幼時の像を齋きまつれるより、菅原の童子天神と呼ぶと云ふ。

下仁田 今は下仁田町と云ひ、北甘樂郡西部の貨物集散地で、上野鐵道の終驛となり、富岡へ八哩、高崎へ廿一哩ある。信州に通ずる驛路は是より二分して、南なるは南牧より餘地峠を登り、北なるは西牧より志賀峠及内山峠を登るのである。

鷹巢城址 前上野志に、鷹巢城は下仁田の岩山なり。小幡三河守眞政居所と云。

廢城考には、小幡三河守は、鷹巢城に居り上杉輝虎に屬し、其後信玄當國西部を打從し時落城と云。小學上野志に云、下仁田に鷹巢の城址あり。或は上杉氏に屬し、或は武田氏に屬し、後北條氏の有となり、小田原の役後に至り、城全く廢せり。近世に至りては、武田耕雲齋の筑波山に敗れて、西に走るや、路次この地を過ぎ、高崎藩の兵と戦ひし所也。

高崎藩士戦死之碑 碑は小坂村大字下小坂字岩下にあり。碑陰に左の文を刻してある。

元治元年水戸藩内訌、武田正生等以數千人據要地、幕府發兵討之、我高崎藩人亦在遣中、十一月正生等西走將赴京都途過上州、幕府更命沿道諸藩拒之、正生察高崎藩有備避取間道到下仁田、藩士聞之曰已奉命

矣。雖疆之外不可坐視也、十六日退及焉戰於小坂、短兵急接、我兵死者三十六人皆善戰云、今茲明治癸巳義徒追悼其死爲建碑于此地、以修冥福併諭其由後昆。

明治二十六年十一月

香亭 中根淑代諸子識

市川三兼書

碑は明治二十六年十一月、二十回忌爲記念戰地北甘樂郡下仁田町及、小坂村有志其他相計りて建てたるものなりと云ふ。

ものゝふの血に泣く涙豈盡きめやも下仁田の梢を朱に染むとも。

けさの朝けみ空まぐれて雁鳴きわたるむかしへの戦しぬぶ我心痛し。

村上蝸魚

松井田 碓氷郡に屬し、郡衙(安中)を距ること三里餘。今は新堀村を併せ松井田町と呼ぶ。人口約四千、鐵道信越線は市街の南を過ぎ、町の北西部に停車場がある。名跡志に云、松井田又松枝と書し、一驛也。平治物語に、義經、上野國松井

田と云ふ所に一宿して、家主の男を見るに、大剛の者と見ゆれば、主従の約をなす。伊勢の國のものなり。伊勢三郎義盛と云ふと(義經、義盛、主従となる事、義經記にては)曾我物語に、頼朝卿其の夜は松井田に宿り給ふ。又同書に、上野國松井田三百町愛甲三郎に給ふ。など載せてある。前上野志に、松井田に學校の跡あり。承和二年小野篁之を建つと傳ふ云々。上野名跡考に云、篁、上野守に成りし事國史に見えず。碓氷は國府にもあらず。此地學校のありしこと疑はしと云ふ。名跡志に、學校は國府に有しにもかざるべからず、下野國の國府は在都賀郡と和名抄に見ゆるを足利に學校あり。延喜の主税式に、上野國學生料稻一萬束とも見ゆれば、篁の建しは疑はしけれど、當國にも此地に學校ありしかも知るべからず「今里人に學校の跡の事を聞くも知る人なし。

松井田城址 大字新堀ニヒホリにあり。名跡志に云、武田三代記に、天文十九年三月信玄シンゲン上州松井田城に捕詰トリツク給ふ所に、木曾謙訪スハへ出張につき引拂云々。關東古戦録に、天文二十一年、景虎カゲトラ、松井田に着陣チヤクケン、當國の先方安中越前守春綱、其子左近大夫廣盛ヒロシゲを嚮導キヤウダウとして、年井に寄る云々。箕輪軍記に、松枝城には飯富兵部、淺利式部アサリシキ、小宮山丹後コミヤマタノゴ、城伊庵、同忠兵衛、原與左衛、市川梅印七頭ナカガシラを差向云々。又武田三代記に云、松井田の城主安中越前守は嫡子左近サコシの諫をも許容せず籠城す。永祿六年二月二十六日武田信玄ムカシラ、六頭を差向て攻まる、能く防ぎ戦て打出る事三度、終に不叶降人カネハズとなる。云々、甲陽軍鑑に云、永祿六年、松枝の安中越前、押詰オシツクられ降參すと雖も、早く佗びざる故御成敗ゴセイバイ、城代には小宮山丹後を差置かる。菅窺武鑑に云、天正十年、信長公より上野カウツケを瀧川タキガハカズマス一益に被下、其後六月一益は上洛前シヤウラクゼンに

111

小田原へ當り、一軍仕懸ヒトイッサシケンべしと、武藏國へ打出、松枝の城には人質ヒトシチを預け、同苗彦次郎を差置かる。西遊行囊抄に、松枝城跡は新堀村の右の松山の上ヒトシチにありと云。前上野志に、松井田城は新堀村にあり、甲州没落後ボツラクゴ、瀧川一益の士津田小平次居る。天正十年七月より小田原持オダハラモチとなりて、大道寺駿河守居之、同十八年五月四日落城、城主切腹セツブク、息新四郎降參、此時城破却すと云。後上野志には、三月十日城を渡して降るとあり。廢城考に、政繁一戦にも及ばず降を請ひ、城を明渡しアケワタシ先鋒の兵に加りけるとあり。傳説雜記に、大道寺は江戸エドにて被誅戮チユウリクセラルと云。かく松井田城主は此時大道寺駿河守スルガノカミなる事諸書に見え、土人の言傳へも同じきを、長尾昌賢エノシヤウキ影像記には、天正十八年四月松枝の城主北條陸奥守ノノカミを攻、不叶降とあるは如何にや。陸奥守は氏照ムツノカミにて小田原にて降り自殺すと、將軍家譜に見え、八王子の城主

なり。などとある。

八幡宮 松井田驛の東側に鎮座して、譽田別尊、神功皇后、玉依姫神を祀り、境内は老杉鬱蒼として茂り、崇嚴の氣が自ら漂うてゐる。創建の年月詳かならざるも、建久年中右大将頼朝公、淺間三原野卷狩に際して、當社域内に休息せられたりと傳へてゐる。

諏訪神社 大字新堀に鎮座して、その創建は永正七年諏訪但馬守當所居住の砌、信州諏訪明神を勧請したるものと傳へ、建御名方神、八坂刀賣神を祀る。

當社の西方澤中に里人神足石と呼ぶ奇石あり、建御名方神の遺跡と傳ふるも、今里人の知るもの少なし。

崇徳寺 貞松山と號し、臨濟宗中本寺にして、京都花園妙心寺に屬してゐる。

開基は相州鎌倉圓覺寺塔頭正傳庵の住僧佛滿禪師、足利尊氏の歸依に依つて、歴應三年寺堂を建設し、尊氏公より寺領朱印地を賜はり、禪師を始祖となす。其後元和年中回録により、殿堂鐘樓等盡く焼失した。時に野州宇都宮興禪寺の住僧疊嶂和尚當寺に於て得度したる縁故を以て、再び當地に來り、寛永八年再建せられた。今の塔堂が即ちそれである。慶安年中達傳和尚の代に於て、井伊兵部少輔の周旋と、春日局の推舉とにより、先規の通り徳川幕府より朱印地四十三石五斗餘を賜る。(寶物として中御門帝の御倫旨外多數あれど略す。)

寺内に永和四年の石塔あり。徳翁の墓と記してある、寺僧は尊氏の孫なりと云ひ、某氏は今川了俊の號なりと云ふ。

不動寺 龍本山松井田院と號し、町の北側にあり。新義眞言宗中本寺にして、

大和國長谷寺に屬し、開基は不詳も往古は背後の山上に在りしが、建仁年中北條時政當山不動尊の靈驗を傳へ聞き、信仰不斜寺領を給し、諸役免除の證を寄す。寛元元年洛陽醍醐慈猛上人諸國巡錫の砌當地に止り、現地に寺堂を造營せられた。元龜年中武田信玄公より、寺領諸役免除の證を給ふ。其の後徳川氏より朱印地八十九石六斗餘を給る。當山は將軍家綱公以來代々の崇敬深くして獨禮地の優遇を受け、又宗派内に於ける、上座移轉地の一寺たりしことは、當時に於いて當山の誇りとした所である。

寺内に江戸知足院惠圓和尚、家綱將車の補助を得て築きたる多寶塔と、家光公の名を刻したる石燈籠がある。

補陀寺 大泉山と號し、新堀にあり、曹洞宗本寺格である。創基は應永年中相

州關本最乗寺開山了庵の弟子無極慧徹和尚の開基にかゝる。和尚は曩に美濃國加知山に寺堂を建立して、大泉山補陀寺と號し、後弟子月江に譲り遊歴して當國に入り、當村に草庵を結びて居住しけるに、後濃州兵亂によりて寺堂焼失したるを以て、月江は師無極の跡を尋ねて當所に來りて、師弟相會し協力して寺堂を建立し、濃州の寺號を移して大泉山補陀寺と號した。元龜年中住職泰州の代に、武田信玄より朱印地を賜り、天正年中住職的翁に、松井田川越兩城の主大道寺駿河守政繁力を合せて大に中興した。天正十一年北條氏直より朱印を給る。天正十八年十二世荆室代、大道寺政繁落城の後衰廢したるを以て、天正十九年寺堂を再營した。慶安元年徳川氏より朱印地四十一石二斗を給せられた。境内に大道寺駿河守の墓がある。

大道寺駿河守政繁之墓、補陀寺境内にあり、停車場より四町。碑面に法名を記し、碑陰に碑文を刻してある。

爽炫院殿光月淨大居士

大道寺駿河守平政繁、其先山城人而北條早雲之親族也。嘗屬北條氏之命、累代顯戰功、主上州松井田、武州河越之兩城領知十萬石。天正年中豊臣相國擊關左時、政繁守當城以拒加能越信之兵久、後及小田原城陷焉。政繁遂不變其志、自殺于河越城下上戸村常樂寺。皆天正十八年七月十九日也。

元祿二年巳七月 日

曾孫大道寺權内 平 直富 制之

伊勢義盛屋敷跡 松井田町の東南、不動寺寺中舊泉福寺の在りし處は、里人、伊勢義盛の父神來義連の居住したる處と傳へてゐる。信偽明かならねど聞くがまゝに記すことにした。

百合若大臣足跡岩 岐蘇略記に云、松井田と坂本との間に、世俗の所謂百合若

大臣の足跡ソクセキの岩と云あり。凡百合若大臣と言人古書に見、世俗の言ひ傳ふ事信じ難し。但し日本武尊をあやまりてかく言傳へたるか。此邊は日本武尊の通り給ひし道なり云々と。今も中山道往還ワウクワンの傍カタハラにあり、これ百合若大臣が此の石に足を踏み、南方に見える妙義山の射貫穴イスキアナを射貫きたるものと傳へられてゐる。里人の言ふ所によれば、碓氷川の畔ホトリに片足ありと言へど、流失したるものか今見當らず。大日本地名辭書に云、前略、木曾路圖會云、坂本宿より松井田まで二里半、其道の側に百合若大臣の足跡石あり。又射拔岩イスキイハとて、峯に岩穴見ゆるなり。貝原氏軒益の曰く、百合若大臣と云ふ人、古書に見えず、日本武尊を誤りてかくいふ歟。豊後、筑前にも、百合若の故跡あり。世の傳へには、嵯峨帝の御宇、四條左大臣公光の子、百合若大臣、九州の惣司として、下向、云々。蜀山人壬戌紀行云、坂

本驛を出て又人家あり、原村と云ふ。薬師坂を下り、川久保橋を渡りて、横川の關あり。村を過ぎて左に社ふたつあり、山の岨を左にし、川を右にし行くに、川の向ひ黒き岩山、二つばかり峙てり。坂を下り左の岨に足の踵の形して、くぼく穿てる石あり、俗に百合若大臣の足跡石といふ。右のさかしき岩山に穴ふたつあり。西なる穴は大に、東は小さし。これは射ぬけ山として、百合若の射ぬきし跡なりなど、輿かくものゝかたるもをかし、もろこしの明月峽のたぐひなるべし。天和年中撰江戸雜記紫の一本云、大多橋は大多ぼつちが掛けたる橋のよし傳ふ。四谷新町の先、笹塚の手前なり。肥後國八代郡の内に、百合若塚あり。塚の上に大木あり。百合若は賤き者なり、大臣と云は大人なり。大太とも云、大人にて大力ありて強弓を引き、よく礮を打つ、今大太ぼつちと云は百合若の事、ぼつちとは

礮の事なりとぞ。一とせ大風にて右の塚の上に大木たふれ崩れたる中に、石のからうと有り。内を見るに常の人の首四つ五つ合せたる程の首あり。不思議なりと見る内に、雪霜のごとく消失せぬ。依之大き成る卒都婆をたて、右の様子を書付て、塚の上に立る、其卒都婆今にありとぞ、百合若は筑紫人にて、玄海が島に於て、鬼を平ぐる事、百合若の舞に見えたり。然るに奥州の島の内百合若島と云ふありて、見とり丸と云鷹の事まで慥にある島ありとぞ。又上州妙義山の道にも、百合若の足跡、矢の跡とてあり。此外にも大太ぼつちが足跡、力業の跡、爰かしこにあり。

横川 今五料と合併して臼井町と云ふ。鐵道信越線の驛路にあたり、高崎を距る十八哩、輕井澤へ七哩ある。彼の有名なる碓氷峠の急勾配に架した、ラックレ

ールとアプト式の汽關車は、此間を運轉せられたのであるが、今は横川から電力によりて運轉せられてゐる。

五料 横川と松井田との間にある村里で、御料の義にして、中世の田制名目に出づる者の如しと云ふ。

碓氷關址 臼井町大字横川の西境字柵の内にあり。木曾路圖會に云、横川には看街樓あり。碓氷の御關所といふ。女切手。鐵砲の御改めありと。大日本地名辭書に云、按、横川、峠町兩所の碓氷關は、近世安中藩之を守り、中山道の要塞と爲せり。是れ専ら江戸幕府の時なるが、古代にも碓氷關あり。已に將門記に「軍攻者足柄、碓氷、固二關、當禦坂東」と載せ。三代格には、相模國足柄坂、上野國碓氷坂、置關勘過の昌泰二年官符を收めたり。其關柵は、此山中何地なりしに

や、興廢の沿革詳かならずとあり。

此の關所の始めて置かれたるは、何れの時代なるか明かならざれども、徳川氏は元和二年に、此の地東海道の箱根と並立して、要害の場所なりとて、井伊直勝に命じて關門を建てしめ、假番所を設け、又坂本驛にも番所を置き、之を遠見番所と云ひたる由、後高崎藩をして之を守らしめ、又安中藩に命じた。關門非常の時に方りては、土民を召集して歩卒に充てたさうである。

坂本 今は坂本宿、原村、峠町、入山、北野牧等を合併して坂本町と呼ぶ。碓氷嶺の東麓にありて、碓氷川その北を流れ、幽邃閑雅なる一區を爲し、古驛の址にして、昔は箱根の小田原に於けると均しく、人馬喧囂、諸侯竜槍の影一日も絶ゆることなく、旅亭又甚だ壯大を極め、娼家列りて頗る賑ひたるも、鐵路一度開

通してより旅客の此の地を過ぐるものなく、近年全く荒涼の山村と變化した。

碓氷嶺 關東平野と信濃高原との、要衝に當る峻嶺にして、夙に紅葉を以て世に知られ、山路は坂本驛より起程し、岐れて新舊の二道となる。新道は南に通じ、鐵道信越線之に沿ひて其の南を駛り、舊道は新道の北部を廻り、峠町權現祠を経るもので、曲折回轉して登路甚だ困難である。新道は明治十一年、聖上北國御巡幸の時之を改修し、同十六年更に改修せられた。同二十六年、山路七哩の間に二十六個の隧道を穿ち、ラックレールと呼ぶ軌道を敷設し(軌道の傾斜平均十五分之二)アプト式汽關車を用ゐ、爰に始めて東京、直江津間の連絡成り、運輸交通の便、古人の夢想の外に出づるやうになつた。而も尙陸道通過の際、車窓より煤煙の浸入に苦しむたるが、今や電力によりて運轉する事となり、旅客の苦悶は茲に一掃し去らるゝ

に至つた。山中一車驛あり、熊の平と呼び、觀楓の季節には、特に乗降の便を開くを例としてゐる。嶺頂に峠町あり、又上信の國境に、縣社熊野神社を祀る。

熊野神社 縣社にして、碓氷嶺の絶頂、上信の境にあり、中央に伊邪那美命、東は速玉男命、西は事解男命を祀る。東の社殿は群馬縣に在り、西の社殿は長野縣に屬して、鳥居、石燈籠、隨身門等皆兩縣に跨つてゐる。神樂殿は明治十一年、聖上北陸御巡狩の時駐輦所に充てさせられた。境内に日本武尊が橋媛を歎ぜさせ給ひたる遺蹟に尊を祀り、若宮日本武神社と號し、又科乃木の大木がある。

千早振る熊野の宮の櫛の葉をかはらぬ千代のためしにぞ引く。

前中納言定家

神社の北方字貞光林に碓井貞光の塚がある。

嶺頂より西に下ること約一里、信越線輕井澤驛がある。

登り行く我が袖寒くひなぐもり碓氷の坂は秋闌げにけり
立ちおほふ狹霧は暗れて榜多白樺の木は紅葉せる見ゆ

村上 蛸魚

三上山 妙義山終

三上山 妙義山附録

磯部鑛泉



磯部鑛泉湧出所

三上毛 妙義山附録

磯部鑛泉

總論

位置 磯氷郡磯部村の西方西上磯部にあり。信越線磯部停車場を距ること約二町、運輸交通共に頗る便利な土地である。

地勢 妙義、大桁の二山西より西南に峙ち、地形稍北に向ひて低下し、北方の一帯は磯氷の清流に瀕して、稻田桑圃その周圍を繞り、乾濕自ら度に適ひ、四面の風景秀麗を極めてゐる。今その一二を列記すれば、西南には淺間の噴烟と、白雲、金洞、金鶏の奇峯とを望み、北に榛名山、東に赤城、筑波の諸峯を控へ、南は甘樂郡の峯巒一眸の中に入り、四季の風光亦絶佳にして、春季櫻花の爛漫たる

より、躑躅の塙上を飾り、河鹿は碓氷川の巖角に謠ひ、城山の頭上錦繡を纏ひ白帽を着くるに至るまで、一として都人士の眼を樂ましめざるなく、眞に山水明媚風光清雅の樂境と云ふべき處である。

氣候 溫和にして寒暑風雨の劇變なく、夏秋は雨稍多く、春冬は之に反して稍

乾燥し、稀に降雪あるも三四寸を超ゆることは甚だ稀である。四時の氣温平均は春期華氏五十四度、夏期七十九度、秋期六十八度、冬期四十五度、最高氣温九十三度最低氣温三十二度なりと云ふ。

沿革 磯部鑛泉は、西上磯部字鹽の窪に湧出して、泉源二ヶ所ある。甲泉はその發見年月詳かならざるも、東鑑に磯部村「此所鹽の湧き出づる處あり。」とあれば往古より存在したること疑ひなきことである。乙泉は弘化四年信州地震の際

俄然噴出すと傳へ、或は天明三年淺間山噴出の時始めて湧出し、奔騰猛烈にして地を抜くこと十餘丈、激騰三日にして漸く其勢を低減し、爾後絶えず湧出して今日に至るとも云ふ。本泉を治病に應用したることも亦年已に久しく、その時代を審かに知り難きも、近世に至る迄は單に之を創傷、打撲、腫物等に外用し又馬脚疾に應用したるに過ぎざりしも、孰れもその効驗著しかりしかば、天保十二年村民某初めて浴室を設け汎く浴客を引かんことを企てたるも、その資乏くして目的を果さず、明治七年縣吏始めて泉質を試験して異常の鑛泉たることを知り、明治十四年に至り試験成績に因り醫治効能發表せられて、漸く世人にその効能を知られんとするに際し、同十七年中山道鐵道布設の舉ありければ、愈々浴場を營むの計畫起り、翌十八年及二十年に内務省衛生局より技師出張して、現場に就き、定

量試験をなし、貴要の諸成分を含有することを認定せられ、次でドクトル、ベルツ、醫學士高田耕庵二氏の有効証明を得たれば、浴室を増築し或は貴顯紳士の別荘を設け、或は指定するもの多く、稻田忽ち變じて市街をなし遂に今日の繁盛をなすに至つた。市街は東西に列り、南北の兩側に旅館茶亭商家櫓を連ね、鑛泉旅館は何づれも高壯清麗を競ひ、客遇亦叮嚀親切を極め専ら土地の發展に心砕してゐる。

泉質及温度 泉質は炭酸泉にして、温度は攝氏十六度六。(華氏六十)

分析 甲泉の分析表次の如し。

鹽化那篤留母(食鹽)	二〇・八九二八	鹽化加留母	〇・五二八六
鹽化麻留母	〇・一二九九	炭酸曹達	七・四四八五
炭酸石灰	〇・六九一九	炭酸亞酸化鐵	〇・〇一五四
臭素那篤留母	〇・〇三〇四	沃士那篤留母	〇・〇〇五五

矽酸	〇・〇二〇五	礬土	〇・〇〇四九
磷酸	痕跡	安母尼亞	痕跡
硼酸	痕跡	滿儉	痕跡

合計 二九・七六八四

游離及半抱合炭酸 三・七〇七〇

乙泉(各成分甲泉と大差なければ略す。)

固形物總量

二九・八三三九

游離及半抱合炭酸

三・六二四七

効能 慢性喉頭加答兒、慢性氣管支加答兒、喘息、肺癆、胸膜炎恢復期、咽頭加答兒、胃弱、留飲、慢性胃加答兒、慢性胃痛、慢性腸加答兒、痲痛、便秘、痔疾、慢性腹膜炎、慢性肝臟炎、黃疸、脊髓癆、ヒステリー、ヒポコンテリ、神經痛、肋間神經痛、坐骨神經痛、慢性泌尿器加答兒、腎或膀胱結石、月經閉止、月經困難、月經不順、慢性子宮加答兒、慢性膽加答兒、慢性癱瘓加答兒、慢性癱瘓質斯、痛風、腺病、貧血症、水腫、脚氣、水腫、慢性皮膚諸病、火傷、打撲、全創。

當鑛泉は獨逸カルルス、ハット鑛泉と其實同一にして、胃腸病に對し特效あり。殊に前記諸病の中胃腸

病、神經痛、リウマチス、婦人病一切、皮膚病の諸病に對しては、當地鑛泉業者は責任を以て保證すこと
ら稱してゐる。

當時當鑛泉は第一號泉、第二號泉と名稱を附し、第一號泉とは從來當地に於て
一般に使用し來りたるものにして、第二號泉は従前は磯部「サイダー」製造原料鑛
泉とし、或は痔疾、梅毒性一切に特效あるものとして知られたるのみなりしも、
大正三年一月内務省衛生試驗所技師出張檢定の結果多量のラヂウムを含有するこ
とを知られてより二三旅館を除く外は第二號「ラヂウム」を使用し、第一號泉は少
數の旅館と製菓用として使用せられつゝある。尙第一號泉も絶対に「ラヂウム」を
含有せざるものにあらず、只比較的少量なるのみである。

第二號泉定量分析表

クロールナトリウム 二一・三五三七分

クロールカリウム

〇・二七三五分

重炭酸ナトリウム	三・七二九三分	重炭酸カルシウム	一・〇八九六分
重炭酸マグネシウム	〇・三五九一分	重炭酸亞酸化鐵	〇・〇一三〇分
ブroomsナトリウム	〇・〇一四六分	ヨードナトリウム	〇・〇〇二四分
クロールアンモニウム	〇・〇〇七五分	ケイ酸	〇・〇二二八分
ホウ酸	〇・九九七〇分	游离炭酸	二・四一五八分

効能

外用 痲瘋實斯、各種神經痛皮膚病、瘰癧、慢性腸加答兒、婦人生殖器病、呼吸器病。
 内用 約十倍量の常水を以て稀釋すべし。
 腸胃病、咽喉加答兒、貧血、生殖器粘膜炎、膀胱加答兒。

大正三年三月十三日

内務省衛生試驗所

所長衛生試驗所技師藥學博士 田原良純
 主任衛生試驗所技師 瀨川林次郎

ラチウム鑛泉飲用法 當鑛泉は飲用を第一とし、浴用を第二としてゐる。用法は鑛泉一ヲンス(我約八匁量)に清水同量或は以上を加へたるものを一回の飲量とし、一日三回食前服用し、服用後十分を経て飲食するを良とする。

注意 原泉の儘飲用する時は體質により通じの止まることがある。

入浴法 當鑛泉の入浴により諸種の疾病に特効あることは、「ラチウム」を含有することに基因するものなることは、學者の等しく證明するところなるも、其方法に注意すべきは勿論である。其入浴温度は華氏寒暖計百度を制規とし、入浴回数は一日三回を適度とするも、順次回数を増加して五六回に至るも支障はない。

「ラチウム鑛泉湯の花」 當鑛泉を蒸餾して精製した固形分で、常に之を用ふれば左記の効能ありと稱せられてゐる。

一、胃腸を強健にす。

二、身體の營養を増進す。

三、體力を強壯にし精力を保持し元氣を旺盛ならしめる。

四、血液の循環をよくし、皮膚を美麗ならしめる。

五、不老にして長壽を保つことを得。

煮物に對する効力 野菜、豆菽類を煮るに、その少量を加用すれば軟かに煮得ること甚だ妙である。殊に湯豆腐中に投入する時は、その質を柔軟にし、味甚だ美となる。但し多量に用ふる時は反つて溶解又は變味することがある。

用法 湯の花を内服するには「三グラム」(普通一瓶三十五匁入な)を清水「百グラム」に溶解し一日三回食後三十分時を経て服用するのである。又温浴用のものは一瓶(四合)を一回分としてゐる、但し兩三人の入浴なれば、二三日間置くも支障なく水量は一回一石を極度とする。

遊覽地

磯部城墟 リゾクシロヤマ 里俗城山と呼び、停車場より東南八九町の處にあり、今はその大部分東横野村字鷺宮に屬し、西上磯部と東上磯部とに亘る小丘である。此地彼の宇治川の戦に於て有名なる佐々木四郎高綱の兄佐々木盛綱の城く所と稱せられ、その高さ十有餘丈、周圍七八町許、頂上は稍平坦にして樹木繁茂し、その舊跡として見るべきものは僅かに二三の大なる石垣の存在するのみなるも、明治二十一年中磯部、鷺宮の有志相謀りて公園となし、山下に櫻樹を栽えれば春期は櫻花爛漫として開き、秋は滿山悉く紅葉して錦千段を織り成すの壯觀がある。

東鑑に正治三年三月三日、越後國城小太郎資盛謀叛、佐々木三郎兵衛尉盛綱法師(法名)有上野國磯部郷、可誅資盛遺御教書、折節西念有門外、乍立拜見之不能

入門内、取所繫于門傍鞍馬乘之、即揚鞭馳向越州云々。北條九代記亦同(名跡志)武家系圖に盛綱の子加地信綱の子に磯部左衛門尉秀忠其子磯部又太郎秀綱、同太郎景秀など見ゆ。但鎌倉武鑑には秀忠を季忠に作れり。(名跡志)其後傳記なしといふ。

大日本地名辭書には、東鑑、建仁元年五月佐々木盛綱磯部郷に居りしに、越後の城資盛兵を起せしより、盛綱進撃の事を録せり。當時其邑也。など盛綱と磯部との關係が見えてゐる。

薬師堂 鑛泉源泉ケンセンの南にあり、堂宇は舊大手萬平氏の所有なりしも、大正二年中信正寺附屬建物として、時の住職荻野隆泉師へ寄附したるものにして、その後同師は増築を行ひ、弘法大師御作と傳ふる三寶荒神の御像を安置したれば、近年

參拜者頗る増加したりと云ふ。

仙石遺跡碑 藥師堂の上にある。小學上野志に、磯部村大字西上磯部村の北字鹽の久保に、仙石因幡守久俊の碑あり。此地もと其封邑なり、地灌漑の利なく、只僅に雨水の澤に依りて、耕耘をなすことを得るのみ。若し夫れ雨なくんば旱魃忽ち到り、野に青草なきを例とす。久俊之を患ひ、寛文中碓氷川を引きて田用水となし、民をして其澤に浴せしめんことを請ふ。允さる。即ち役を起し工を督す。民歡びて其役に就くもの二萬餘人。二旬を出てずして竣工す。溝渠長さ一千五百餘間、是より復水旱の患なし。民歡呼して曰く、河水東流して庶種荐りに登り、永久當年艱阻の患を免れしめたるは、一に公の賜なりと、乃ち嘉永五年に至り、爲に廟を建て、其功績を石に勒せり。と、次に重複の繁を免れざれども碑文を掲

げて參考に資することにした。

仙石公遺績碑

綾瀬龜

梓撰

古之人有功着一方德蒙後世焉則勒之金石置之廟堂百代崇祀香火不絶所以報其德者至矣謹案上毛磯部村舊

仙石因幡守源久俊公封邑也地固高燥無灌漑之用遭天雨澤始能施耕種之功焉若夫雨暘錯節旱魃爲虐則上焦種槁野無青草阻飢之嘆連起 公特憂之寛文中上疎請官曰臣封邑磯部村 凡二千名土高壤燥灌漑乏水荐遭旱乾民生不遂臣甚哀之欲穿溝引確氷之水而灌之力微用不繼伏請獻臣封邑於官更賜臣他邑此地得浸灌之用則一方生民世世饒富永浴上恩 上乃允其發徒起役衆皆歡焉執器摻用而就役者二萬餘人渠長千五百餘間事二旬而成河水奔注鄰邑大竹村亦得浸潤之利爲於是槁壤易而沃土見怨嗟

息而歡聲作磯部村衆民相議曰河水東流庶種荐登使吾永免艱阻之患者皆 公之賜也
乃建廟祀 公崇其號曰 稻葉大權現每春秋迎 公神恭修祀典焉乃使余作文勒之于
石建于廟門使永世無遺 公德焉又國作銘銘曰

碓氷之水、滾滾東流、百穀蓁蓁、以盈平疇、惟公之德、代歎以謳、清酌庶羞、
惟享惟酬。

嘉永五年歲壬子冬十二月

雪城澤俊卿書并題額

碑の後方二間許の處に自然石の墓標ありて表面に、

賢徳院前田州太守東溪祥哲大居士

裏面に、

天和元年辛酉十一月二十一日

葬京都妙心寺塔中桂春院

於伏見卒享年六十二

仙石因幡守久俊墓

嘉永六年癸丑孟春建之

磯部公園 磯部停車場より約二町、鑛泉地通路の突き當りに華表ありて、村社
赤城神社鎮座し、境内は老杉頗る繁茂してゐる。社域の周圍には櫻樹と躑躅とを
植ゑ、西北は碓氷川に臨みて斷崖をなしてゐる。此地舊井上伯の別邸たりし處な
りしが、後原市の人半田善四郎氏の所有に歸したるを、當地の有志謀りて之を借
地し、明治四十年に公園となし、花木を補植し、石を置き、亭を建て、ベンチを

設け等して大にその面目を一新した。今園中の大觀を示せば、碓氷の清流を隔てて我上毛の三山と碓氷、淺間等を遠望するの奇觀又は壯觀なる、或は櫻色の爛漫たる、躑躅と紅葉の艶麗なるは言も更なり、新緑の青嵐、夏季の納涼、崖上の河鹿、秋夜の蟲聲、觀月等指を屈すべきもの甚だ多く、從て浴客の逍遙するもの四時絶ゆることなしと云ふ。

松岸寺 鑛泉地の東方約十町の所にあり。磯明山松岸寺と呼び、門前木標を建て、正面に佐々木盛綱入道西念之古墳地、左側に大野九郎兵衛入道遊謙之墓地、右側磯明山松岸禪寺と記してある。

佐々木盛綱之墓 堂宇の左側に在り。明治二十年元老院議員黒田清綱氏、周圍に石を積み、樹木を植ゑ、傍に一碑を建て、次の一首を刻してある。

題佐々木盛綱古墳

正三位源清綱

ありしよのほまれと共に不朽してあるしの石の残りけるの南。

盛綱は近江の人佐々木秀義の三男にして、高綱の兄、その當地に居りしことは東鑑などに明かなるも、大日本史に、盛綱晩年に願蓮房と稱し、越前福井に眞宗寺を建て、住せし由記しあれば、此地に墳墓のあること稍疑はしきも、前記の如く武家系圖に、子孫尙當地に住したる由載せられたれば、蓋しその歿後子孫の此處に建てたるものと見て誤りなきことであらう。

大野九郎兵衛之墓 當寺内に別に大野九郎兵衛の墓と傳ふるものがある。九郎兵衛は播州赤穂の臣にして主家歿落の後、當地に來り手習師匠となり、後入道して遊謙と號し、當所にて歿したる由傳ふれども、その由來甚だ不明である。

瀧山 碓氷川を隔て、原市町に屬し、磯部停車場を距ること約十町許、丘上に老松繁茂し、内に一瀑布あるによりて名づくる所と云ふ。林中又一宇ありて聖明寺と呼ぶ。土地高燥にして眺望に富み、樹下は夏涼うして納涼に適してゐる。されば夏季浴客の曳杖するもの甚だ多く、又山下に果實園ありて來觀者は渴を濕すことを得。

横野の董 大日本地名辭書に、人見ヶ原より東南碓氷、甘樂、片岡(今は群馬郡)の三郡に涉れる山野を横野原と名づく。東西四里、と。後上野志に、眞光寺原一名人見原を横野とす。妙義の麓なり。亦赤城の麓をも云ふと。行囊抄には玉村の邊(今は佐波郡)を横野となし、玉の横野と稱ふ。此と別地也、と。名跡志に八雲御抄、藻鹽草、類字名所和歌集、歌枕名寄、秋寐覺等に横野上野と在り。等とある。

萬葉集十

紫之根 延横野之春之庭 君乎懸管 鶯名雲

新續古今、春

俊成卿

紫の根はふ横野のつぼすみれ眞袖につまん色もむつかし

山家集

西行

董咲く横野のつばな生ぬれば思ひくくに人通ふなり

夫木集

前大納言顯朝卿

春のくるゆかりなるらん紫の根はふ横野に鶯のなく

同

家隆卿

紫の根はふ横野の春駒は草のゆかりにつなぐなりけり

夫木集

藤原行資

白露シラフユもうつりにけりな紫の根はふ横野の秋萩ハギの花

勝地吐懐篇に横野は河内國澁川郡の名所と論ぜらるれど、中古より當國にても名所とせられてゐる。

磯部十二景

妙義セイヤの晴嵐セイラン 碓氷ツツイの過雁カガシ

浅間アサカの暮雪モセツ

都原トハラの夜雨ヤウ

瀧山タキヤマの晚鐘バンシヤウ

榛名ハンナの朝霞アサカスミ

赤城アカギの秋月シユウゲツ

城山シロヤマの躑躅ツツジ

横野ヨコノの夕照ユウセウ

人見ヒトミの列車レンシヤ

桐淵キリプチの渡舟トシユウ

鹽窪シホクサの鑛泉クワン

蓬來館主大手萬平氏藏品中、島地黙雷師の十二勝の漢詩あり。又黒田清綱伯所詠の磯部七勝の和歌を藏せらる。

妙義晴嵐

清綱

雨はれしあしたのくがに吹きにけりまら雲山の峯のまつ風

榛名晚霞

同

野燒ノヤキせしけふりと見えてはるな山はるかになびく夕かすみ那

赤城秋月

同

研トきあげてかけしかみと見ゆるかなあかきの山の秋のよの月

浅間暮雪

同

夕月のあげると見しは浅間山たかねの雪のひかりなりけり

横野夕照

同

むらさきの根はふ横野に鶯の聲もにほひて夕日さすなり

河原落雁

清綱

碓氷河とほきなゝのれに影見えて今日も落くる天津雁がね

瀧山白雨

同

瀧山のたきのひびきにおとそへてひとむらかゝる夕立の雨

産物

「ラヂウム」鑛泉湯の花

製造發賣元は鳳來館大手萬平氏にして、その効力用法

は已に前に記したれば、次に定價と送料とを記して讀者の參考に供しやう。

内服用一瓶 (三十五分) 金拾五錢 送料三瓶迄金八錢

溫浴用一瓶 (四十分) 金四拾錢 送料 金拾五錢

附記 ラヂウム鑛泉源泉 當鑛泉源泉は、多忙若しくは疾病のため來浴し能はざる諸彦の爲に左記の價

格を以て發賣してゐる。

第二號ラヂウム鑛泉源水四斗入樽代共金壹圓也、送料先拂。

第一號製藥用源水四斗入樽代共金六拾五錢也、送料先拂。

磯部鑛泉サイダー

磯部鑛泉炭酸水。共に磯部鑛泉株式會社の製造にかゝり原

料は胃腸の機能を増進する効力ある當鑛泉源水を用ゐ、源泉の周圍は煉瓦を以て

深さ三丈を圍繞し、内部に釉藥を施したる土管を以て引用してゐる。殊に當鑛泉

は細菌學上殆ど細菌の存在を認めずと稱せらるゝも、尙無菌を期する爲に完全な

る濾過器を通過せしめたる上に、石英水銀に電流を通じ、放出する紫外光線によ

つて、水中の細菌を撲滅する効力を有する「ウエスチングハウス」殺菌器を裝置し

て、殺菌したる鑛泉を使用するを以て、その製品の優良なることは他の井水や水

道の水を使用するものと、同日に語る可きものではない。従つて之を稍過用する

も下痢の憂なく、適度に用ふれば食欲を増し、利尿に効力ありと稱せられてゐる。

齒磨粉原料 土佐産の石灰(酸化カルシウム)を風化せしめ、當鑛泉より放出する天然炭酸瓦斯を應用して精製するものにして當地小林製薬所にて製したるものを小林ライオン齒磨本舗に送り、その製造原料に供するのである。

礮部煉瓦 礮部煉瓦製造所の工夫にかゝる鑛泉應用の煉瓦にして耐久力無比と稱せられてゐる。

鑛泉應用菓子類 當鑛泉を應用製造した菓子類に、礮部煎餅、礮部おこし、鑛泉饅頭、鑛泉飴等數種類あるも、今は主として煎餅と「おこし」だけ製造してゐる。

鑛泉旅館

著者本稿を草するに當り、特に當鑛泉地に至り區長、有志に就きて調査すること前後數回、殊に旅館に

つきては公平に紹介せんことを期したるも、各旅館につき一その真相を記述し得ざるを憾みとするも、見聞するが儘に記して参考に資することにした。

鳳來館 大手萬平氏 當鑛泉地の開拓者にして

此の地の一等旅館である。當館主は創業以來土地の發展と、家業の擴張とに盡瘁せられ、夙に世人の評判を得、極めて信用ある旅館で、市街の突き當りに在る三層樓である。客室百有餘間を有し優に五百餘名を宿すに足り、客室浴場共に清潔にして、諸般の設備よく整ひ、諸事懇切を旨とし、

礮部鑛場鳳來館之一部



磯部館一之部



頗る勉強と便利とを圖つてゐる。されば内外貴顯紳士の入浴せらるゝものは、概ね當館に宿泊するを常とし、往年小松宮、北白川宮、閑院宮各殿下御宿泊の榮を辱うした事もあるさうだ。

本館は湯治滞在客の爲に賄と自炊とに別ち、普通宿泊と團體宿泊との便もある。殊に團體宿泊を歓迎するさうである。

磯部館 櫻井秀雄氏 當地市街の突き當りを右折して、小林製薬所の前を左折すると、磯部館と記した門標がある。又妙義方面から間道を下り來

磯部鐵泉旅館

對岳樓林益造



ると、例の舌切雀御宿案内の目印がある。當館主人は舊三景樓の後を引受け、創業日尙淺きも、土地の發展と家業の繁榮とを期し、諸般の設備に注意し、客遇懇切に諸事便利を圖るを以て旨としてゐるので浴客は月に増し日に殖えて今や舊來の旅館を凌ぐ趣きありとの評判である。客室浴場共に清潔にして、眺望も亦頗る稱すべき處がある。當館は殊に滞在客の爲に便利を計らるゝさうである。

對岳樓 林屋益造氏 鳳來館につぎて舊き旅館で、其の評判は磯部館と伯仲してゐる。磯部館の側を西に向ひ左折して

又右折すると、突き當りの廣き庭園ある旅館である。客室は碓氷河に接し瞰望の自由ありて風景甚だよろしく、庭内には池ありて鯉魚を養ひ、浴客の旅情を慰むるに足り、客室浴場は勿論日用の百器何れも新清にして、甚だ心地よき旅館である。當館は普通宿泊と席貸との二種に分ち、各自の御好みに任せて應ずるさうである。旭館 市街の南崖上にありて、眺望に富み、前後に櫻樹列りて花時一段の見榮えがある。近來殊に安値にして懇切との評判を得て、甚だ繁昌するさうである。外に山城軒を第一として、末廣館、信泉亭、八千代館、長壽館等ありて中には進取的營業振りを缺くものもあるやうなれど、一般に清潔を旨とし、客遇懇切にして、自己の業務と土地の發展とに勉めつゝあるものゝやうである。

上毛 妙義山附録
磯部 鑛泉 終

大正六年十月二十五日印刷
大正六年十月二十八日發行

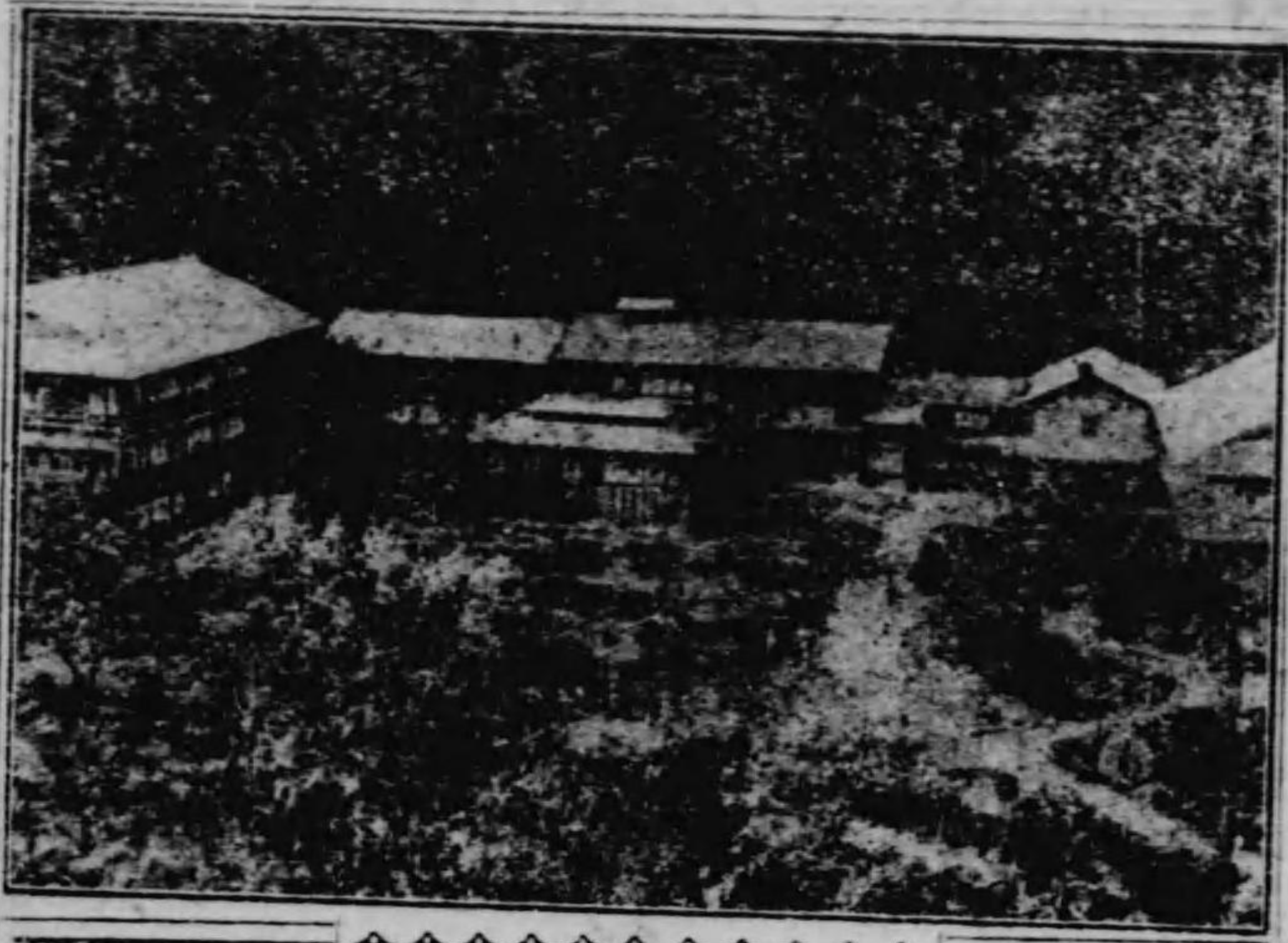


著作兼 發行者 岩澤正作
印刷者 増田末吉
印刷所 合名會社大川印刷所
發行所 赤城書屋

定價四拾五錢

大賣捌
同

東京市京橋區元數寄屋町三丁目七番地
會社北隆館書店
群馬縣前橋市曲輪町二番地
煥平堂書店



赤城山梨木鑛泉

勢多郡黒保根村

湯元梨木館

深澤直十郎

☒ 大間々町より 二里六町

☒ 上神梅驛より 一里六町

岩澤著 赤城山 再版

定價 金五拾五錢 (送料共)

岩澤選 赤城山植物腊葉標本

百種 (甲種) 金拾圓
一組 (乙種) 金六圓

岩澤著 磯部鑛泉誌

定價 金拾五錢

岩澤著 上毛 三山 榛名山

近刊

上州大間々町 赤城書屋

御旅館
御休憩所

妙義町

養氣館
菱屋傳平

☒ 黒門坂を上り突き當り ☒

御旅館
御休憩所

妙義町

東雲館
齋藤鐵次郎

妙義神社石段下向つて右側

和洋酒類各種
名物御みやげ袋調製
名物生そば、うどん
手輕御休み所

妙義町

榮屋

名

梅羊羹
葡萄羊羹
葡萄酒
各種苗木類

物

妙義町

撰種園
小澤善平

(葡萄園)

中之嶽登山の中途御休憩所

妙義神社より十五町

旅

館

樂水軒

玉

屋

妙義町



名所繪はがき

中之嶽名所
繪はがき

御休憩所

金

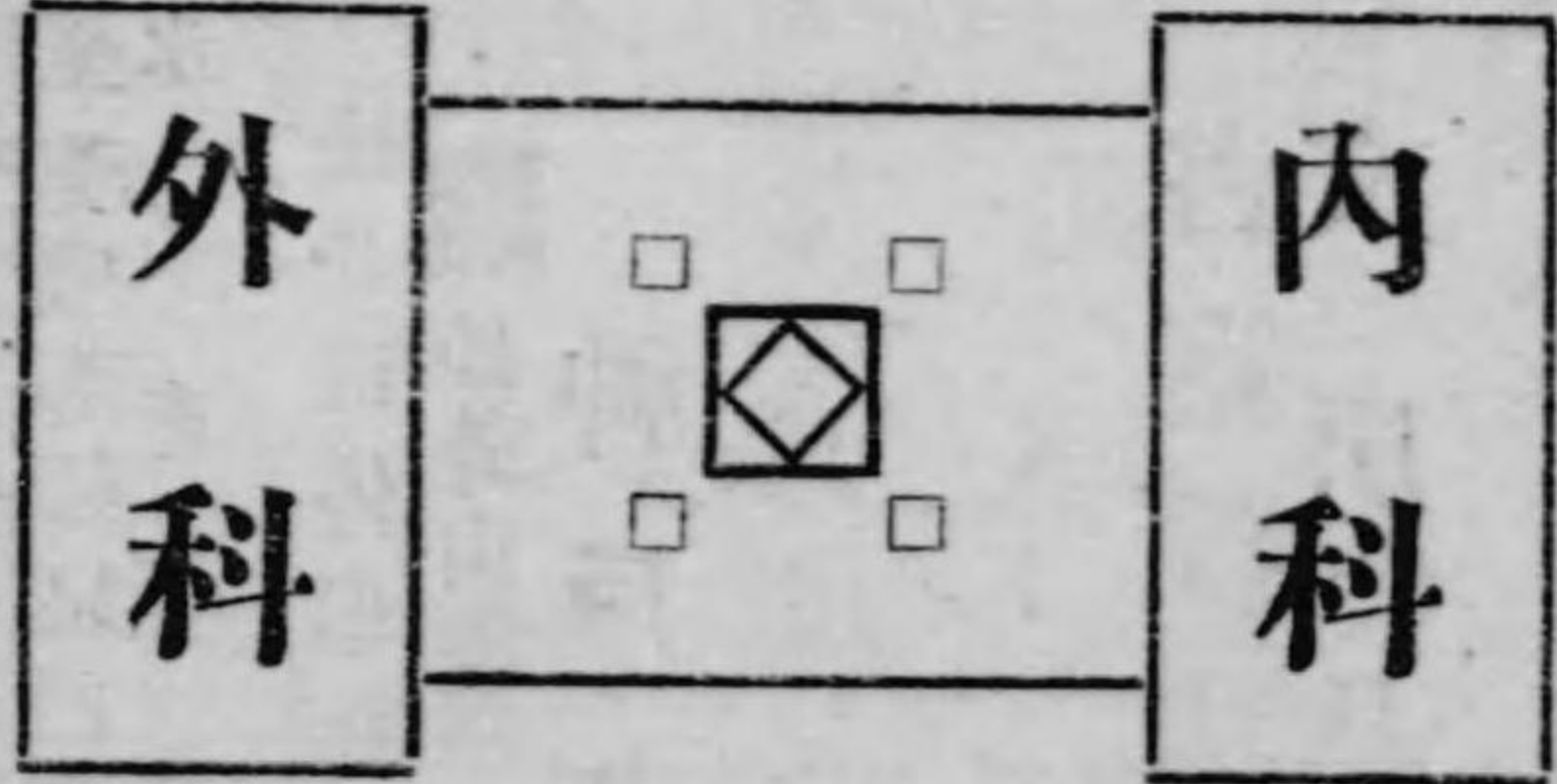
洞

舎

妙義山一本杉

中之嶽社務所内

御休憩所



松井田町(すや旅館前)

田口醫院

愛知醫學士 田口仲男

旅館すや徳七郎

松井田町

妙義方面への別れ路より約
一町構内に庭園があります

煙草妙義山名所繪はがき
妙義羊羹磯部鑛泉煎餅
確氷名産蜂蜜

松井田停車場前
御休所 妙義山菱屋支店

神戸藤三郎

松井田町
文書房 須藤書店

書籍雜誌
文房具

立見屋號
高崎市相生町
金宮崎書店

電話 五三三三
振替東京 一六四二三

造庭
盆栽
草花

有花園

龜田五郎

高崎市和田町神武祠畔



高崎市相生町

陶滋器類

深澤彌平治

電話 百四拾九番

高崎市寄合町

書籍雜誌
文具

龜升屋書店

電話 四〇六番
振替口座 東京二〇九六

高崎市田町六九

上野新聞
上野新聞社

電話 編輯用 二一三〇
販賣用 一三〇二

擊劍道具
銃劍道具
馬具皮具
新調修繕

武具師 清水孝四郎

高崎市新町七四

新刊書籍日々着荷
御注文の書籍は迅速に
且つ安價に取次ます



高崎市中紺屋町

書籍雑誌
誠乎堂書店

電話 二二七番

私の店で賣る品は

滋養になる食パンと洋菓子

美しくておいしい

蒸菓子です。

本店 高崎市連雀町
支店 前橋市堅町

食パン 日英堂

食パン本舗

電話 二〇三
振替東京 八〇四

其外洋食のお道具も原料も西洋の

お酒も肉も果物の罐詰もあります。

煙草は内國、輸入、葉巻と
紙巻の一式を販賣いたします。



高崎市鞆町七十二番

毛織物商 網島洋服店

電話 二十二番
振替東京一三六七六



前橋市北曲輪町

上州新報 上州新報社

電話 五十一番
振替東京二六一三二番

前橋市曲輪町

上毛新聞 上毛新聞社

電話 編輯部用三〇番
營業部用五一七番

群馬新聞 群馬新聞社

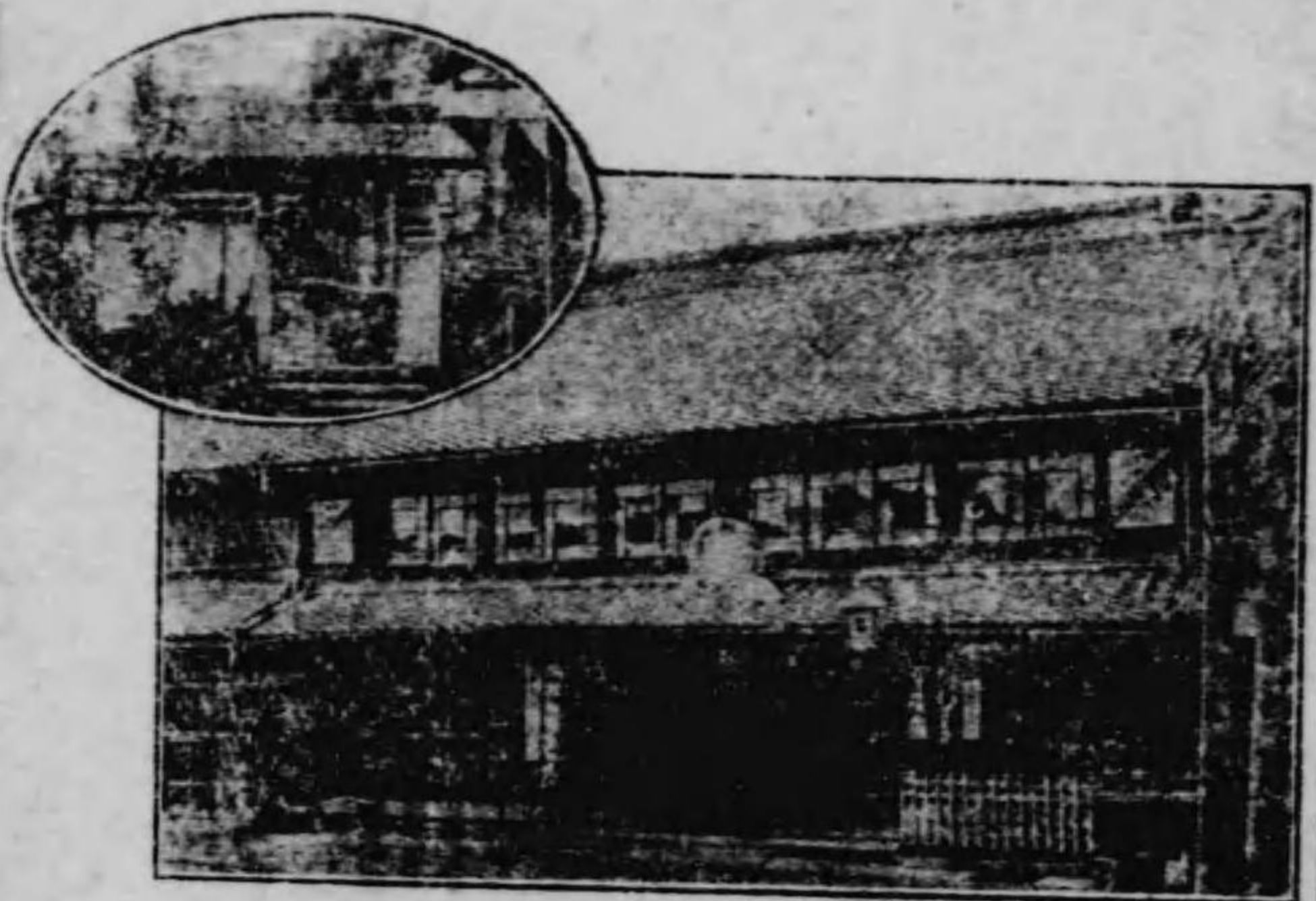
前橋市堅町七十八九番地

電話 編輯用 二九番
營業用 四〇五番
振替口座 五一八二九番

上毛及上毛人

前橋市南曲輪町一九

發行所 上毛郷土史研究會



旅館 油屋安太夫

前橋市本町電車停留場角
停車場通り突當リ

モシ 二二九